

繁栄・恐慌と銀行信用

—アレン・A・ヤングの景気循環論(2)—

松尾 隆

目次

はじめに

1. 繁栄と銀行信用

1.1 貨幣供給と価格変動

1.2 「利潤」の実現、再投資と銀行信用

2. 恐慌と銀行信用

2.1 「銀行信用量の不安定性」と銀行準備

2.2 「恐慌の銀行理論」批判

2.3 貨幣所得の再分配と「調整の過ち」

おわりに

はじめに

本稿の課題は、アレン・A・ヤングの景気循環論を理解することにある。もともと、すでに不況から回復期の銀行信用の役割については、【松尾 2002】のなかで見てきたことから、ここでは繁栄期と恐慌時のそれに焦点を当てる。

この期間にあっても銀行信用は重要な役割を担うという理解から、ヤングは次のように述べている。すなわち、回復期は本来は「正常な状況」であるにもかかわらず、「回復は拡張へと進み、そして拡張は膨張へと進む。このことは、現代の銀行業の作用の下では、避けられないことかもしれない」(Young 1924d, p. 5134)、と。この指摘を踏まえて、以下では、具体的にヤングに傾聴しよう。

1. 繁栄と銀行信用

1.1 貨幣供給と価格変動

ヤングは、景気循環は「自己生成的」であるという。そうであるならば、恐慌に至る前の拡張期または繁栄期に、恐慌に結果する何らかのものが、形成されそして累積されてきている、と解釈してよかろう。このように理解できるとするならば、まずは、拡張・繁栄期の理解が避けてとおれないであろう。ヤングは、つぎのように述べている。

「ビジネスの拡張期に作用する諸力は、部分的には機械的秩序 (mechanical order) の類のものであり、部分的には心理的秩序の類のものである。拡張 (expansion) は、株式取引所の強気筋 (bull) の動きの特徴の多くを大規模に複製することでの、ビジネスにおける強気筋の動きである。その支配的特徴は、将来の売りに由来する所得を無視した楽観的な当座の利益の追求 (discounting) である。しばらくは楽観的期待は自らを正当化する。生産費として支出された貨幣は商品に対する消費者の需要という形態で帰ってくる。そして物価上昇期には、消費者は自らの判断で市場では強気筋の側に入っていくということに注意がはらわれるべきである。消費者へのより高い価格でのより多くの販売は、より多くの銀行信用の前貸しを要求し、しかもそれを正当化するようにおもわれる。再び消費者の所得が増加するにつれて販売も増加する。そのようにして、何らかのものがそれに終わりをもたらすまでは、この拡張のプロセスは累積的に継続する。」

(Young 1927, p. 69)

ここでヤングは、恐慌に行きつくまでは「機械的」ないしは「力学的」要因と将来に対する楽観的期待という「心理的」要因、または投機がお互いに作用し合い、それらが織りなす関係のなかでビジネスの拡張期という状況が生み出されることになる、という。確かにかれば、心理を原因とする景気循環の説明

にかんしては、【Ely 1923】、また【Young 1924d】のなかで、「ビジネスにおける楽観主義と悲観主義のかなり規則的なリズム的な交替」（Young 1923, p. 324）を説明できないとして、批判していた。しかしながら、ここでは心理的要因の果たす役割が強調されているように、ヤングは決して心理が景気循環と大いに関係しているという事実を否定しないのである。

たとえばここでは、株式取引所の上げ相場を引き合いに出しながら、その状況に拡張期の生産活動が類似していると指摘している。もう少しこの点に触れておこなれば、たとえば【Kaldor 1990】のなかでは、「『厳しい危機（High Conjuncture）』の最も重要な要因は『競争上の錯覚（competitive illusion）』である」と記されている。錯覚はより具体的には「株式取引所の強気筋の相場に示される」がごとくであると述べ、そこでは「通常的需求曲線は投機のため逆さまにされなければならない。価格が高ければそれだけ、需要はより大きい」（Kaldor 1990, p. 82）ことになると述べている。ここでは、投機に孕まれる均衡破壊的側面が強調されていると理解されるべきであろう。なぜならば、Youngにとって、投機は全面的に否定されるべきものではなくて、そもそも投機それ自体経済的な意味で「善（the good）」（Young 1924c, p. 4869）をなしうるのであり、むしろ積極的に評価されるべきでものであったからである。

同じことは商品市場での投機にも言えることであった。たとえば、時間的にまた空間的に、「投機は、総供給がもっとも好ましい方法で利用されるように、その消費を分配する傾向がある」のである。別の言い方をすれば、商品市場で活動する「投機家は、かれが賢明にそして洞察力をもって操作する限りでは、実際富の生産者である」のである（*Ibid.*, pp. 4866-4867）。

このように、ビジネスの拡張および恐慌との係わりで問題とされるべき、そして均衡破壊的性格の投機とは、「賢明さ」や「洞察力」を欠いた、いわゆる「過度の投機（over-speculation）」（*Ibid.*, p. 4870）である、と解釈できよう。そしてかかる投機においては、消費者や企業家の楽観的期待が決定的な役割を果たすことになるとはいえ、また商品市場での「投機的変動（swing）」は、たとえ株式取引所ほどには貨幣市場の状況と結びつきが強くないことから激しくないとはいえ、銀行信用が投機に何らかの意味で関与していることが、指摘されても

いるのである。

それにしても、そもそもヤング自身が累積的過程の一因である心理的要因について必ずしも詳細には述べていないことから、ここでは心理的要因についてはこれ以上触れることは控えたいと思う。そしてこの点については、本稿の最後の部分で改めて取り上げることにする。そこで、以下では、まずはかれが「ビジネスの状態に関する人々の見解の背後には、大部分の研究者が同意するように、心理的秩序が作用しているというよりは準機械的秩序という経済的諸力が作用している」(Ely 1923, p. 324)と述べていることから、この点を踏まえ、傾聴しつつ、景気循環のメカニズムを解明したい。

さて、「この拡張のプロセスは累積的に継続する」ということであつたが、引用文から察するに、そのプロセスで作用する要因としては、具体的には、生産の内容およびその量、消費者の需要およびその構成、商品の価格、利潤、貨幣および銀行信用などが想定されている、と思われる。換言すれば、「強気」という心理的作用も働いて、消費者の需要、企業家の将来の判断に基づく生産および取引量の増加、物価水準の上昇、貨幣および銀行信用の膨張が、原因または結果として複雑に絡み、この絡み合いのなかで拡張プロセスは累積的に進展する傾向がある、というように推論できるであろう。まずこれらの点について、掘りさげてみたいとおもう。

われわれはこれらの点については、【松尾 2002】のなかで、生産一般と銀行信用の関係、換言すれば、産業流通と金融流通の関係として抽象的次元に於いてではあるが、すでに取り上げてきている。だが、ここではもう少し具体化したい。そこでまずは、ヤングの次のような指摘を手がかりにしたいとおもう。

「事実問題として、もっと深刻な問題が、これらの貨幣の異なる価値または購買力が絶対的に一緒に変動することはないという事実のために、生じる。価格上昇期には、ある価格は他の価格よりも早くしかも大きく上昇する。下落時にはある価格は他の価格に遅れる、またはそれどころか上昇することもある。この問題の研究者はますます明らかに、われわれの貨幣システムが原因となっている主要な病弊は、いわば、価格の隊列が一行に並

んで進まないという事実、即ち落後兵と脱落兵が存在するように、前衛も常に存在するという事実によって引き起こされる産業の調整の過ち (maladjustment) と混乱 (dislocations) であるということ、理解するようになってきている。」(Young 1924d, p. 5125. イタリックー原文)

ヤングにとって貨幣は決して単なる媒介的手段ではない。なぜならば、「現代のビジネスは貨幣をタームにして考えることを学んだ人間によって遂行され、そして価格形成プロセスは大きくはかれらの手中にある」(Young 1927, pp. 201-202) からであった。よって、経済理論は、貨幣を排除したバーター取引ではなくて、貨幣価格を前提とした「市場のポジティブな事実を直接対象」(Ibid., p. 224) とすべきであった。

さて、最初の引用文では、拡張期には物価が累積的に上昇する傾向にあるという指摘にとどまっていた。だが、上の引用文で強調されている点、または認識されるべき事実とは「価格の隊列が一行に並んで進まないという事実」である。「落後兵と脱落兵」と「前衛」の併存。一般的な物価水準はあくまでも個々の商品価格の変動の結果にすぎない。すなわち、かれの理解では、抽象的な一般物価水準の上昇ではなくて、まさに個別具体的である「相対価格の構造のねじれ」(Mehrling 1997, p. 41. イタリックー原文) という事実こそが、経済的病弊である「産業の調整の過ちと混乱」を結果として惹き起こすことになるのであった。そしてその場合に、相対価格の変動に絡むのが、「貨幣システム」である。

そこで「貨幣システム」と相対価格の変動の関係に言及したいとおもうが、以下では、まず、貨幣供給と物価一般の関係をとり上げ、つぎに、長期的な物価変動のプロセスについて傾聴し、最後により短期的な物価変動について推測することで、その内容の具体化を図りたいとおもう。

まずは、貨幣システムと物価一般の関係についてであるが、両者の関係を要領よく示すのが、交換方程式 $MV + M'V' = PT$ である。なぜならば、ヤングにとって、貨幣数量説が正しいことは「自明なこと (truism)」であったからである。

ここで方程式について、若干補足説明しておこう。 M は一般的に受け入れられる交換手段の総量を意味し、具体的には金属貨幣、政府紙幣、銀行券が含まれる。 V は流通速度（流通界にある様々なドルが1年間に商品及びサービスと交換される平均的回数）を意味する。その場合、 MV は貨幣単位ではかった、支払い貨幣総額を意味する。また、 M' は譲渡可能な「貨幣を受け取る権利」を意味し、ほとんどは小切手に従う銀行預金で構成される。 V' は預金の回転率を意味する。 T は取り引きされた総量、より正確には1年間に貨幣と交換される商品・サービスの単位の総数を意味する。そして最後に P は単位当たりの平均価格を意味する (Ely 1923, p. 293)。

方程式から明らかであろうが、ヤングの場合、現代の貨幣システムは、銀行制度が前提されており、それに担われてのそれであるということである。また、金属貨幣、銀行券、銀行預金の相違点やそれらの間の関係に関するヤングの理解については、ここでは具体的には取り上げて述べないが、かれは本位貨幣である金貨の意義と金「支払約束 (promise to pay)」である銀行券、同じく「支払約束」とはいえ個人の信用に基づく銀行預金の関係を問うているということだけは、指摘しておこう。

さて、この交換方程式に基づいて、物価と貨幣量の関係について、ヤングは「 V 、 V' と T が一定のままである一方で、もし M と M' が等しい割合で増加するならば、 P もまた同じ割合で上昇しなければならない。すなわち、他のすべてのものが等しいならば、流通界の貨幣量そして銀行預金の増加は比例した物価の上昇を伴うに違いない」、と指摘する。だがすぐ続けて、「事実、どの程度『他のすべてのもの』は同一のままであるだろうか」(Ibid., p. 294. イタリックー原文)、と問うてもいる。そしてこの点については、次のように述べる。

「まず第一に、流通貨幣額 (amount) の突如の増加が、増加した購買力に導かれて、 T を、すなわち総取引量を増加させるのは極めて確かなことである。しかし長期的には、総取引量の増減は、その国の天然資源、人民の生産的エネルギー、そして分業が実現している程度に、依存しなければならない。それは流通貨幣額に永遠に依存することはできない。第二に、貨

幣供給の突如の増加は、当分の間より大きな額の貨幣が使用されないままに維持されるであろうから、一時的な V 、すなわちその流通速度の低下をもたらすであろう。しかし、価格が一定でそして取引量が一定であれば、 V は長期的には、通常手許に残しておく『ポケットマネー』額に関する人々の習慣に、非常に大きく左右されざるをえない。この種の習慣の変化はゆっくりとしたものであり、長い年月においてすら物価の動向を研究する際には無視しても問題はなからう。

第三に、 M の増加が M' の規模 (magnitude)、すなわち小切手の振り出される銀行預金額に及ぼす効果について考慮するときになったが、これらは必然的に関係していることに気づく。それは、 M 、すなわち流通貨幣額の増加が銀行準備の増加を伴うのは極めて確実であるからである。本国の貨幣ストックへの追加は、それ自体銀行準備と直接流通に究極的には配分され、そしてこれらのふたつの使用に割り当てられた本国の貨幣ストックの割合は通常は、たとえ徐々に変化するにしても、ほぼ明確な枠内でのみ変動する。しかし、銀行準備の増加は、通常は M' 、すなわち小切手の振り出される銀行預金額の増加に結びつく。 M の増加は、それ故に、かなりの精度で M' の増加をもたらす。」(Ely 1923, pp. 294-295. イタリック—原文)

ここで、第三の点については若干補足説明しておこう。銀行準備と銀行預金額の関係について、【Young 1924d】のなかでは「銀行の当座預金額は、法律及び銀行業上の経験によって、銀行準備にある貨幣額の倍数に制限される」と述べ、またここでは V' については言及されていないが、「銀行預金の回転率」は、「疑いもなくその共同体の習慣と慣習とともに変化するであろう」(Young 1924d, p. 5127) と述べている。

以上のことから、われわれは、 T 、 V 、 V' 、直接流通にある貨幣量と銀行準備の割合、そして銀行準備率の要因は「共同体の習慣と風習」という多様な制度的要因に左右される、とヤングが把握していたことを窺い知ることができる。従って「これらの限定的な要因の影響を考慮すれば、貨幣量の増減は、取引量

が一定であるとするならば、物価の比例的な一般的な上下を伴わなければならない」(Young 1923, p. 295. イタリック—原文)ということになるろう。

だが、すでに述べたように、ヤングの関心は貨幣量と一般的な物価水準の関係に決してとどまるものではなかった。次のようにいう。

「われわれは貨幣量の変化と物価の変化の間の数学的に必然的な関係について考慮してきた。物価の数量理論は、交換方程式の形態で述べるときにあっても、一般的な物価変化のプロセスについてはなにも教えてくれない。すなわち、貨幣量の変化が一般的な物価の変化に結びつくメカニズムについて何も教えてくれない。まさにどのようにしてこれらの物価の一般的な変化はもたらされるのであろうか。」(Ely 1923, p. 296. イタリック—原文)

そもそもヤングは、例えば「『他のすべてのもの』は同一のまま」と前提するような、特定の関係のみを抽出し、その関係を解明することに、決して満足しない。これは「エコノミスト達のお好みのフレーズ」であるが、現実を真に描き出しているというよりは、「複雑な問題を分離した部分へと区分する単に便利な方法にすぎない」(Young 1924d, p. 5127)のである。かれにとって、有機的社会のプロセスは総体として接近されるべき対象であって、「『他のすべてのもの』は同一のまま」というような仮定をおく「交換方程式は物価の動態理論の枠組みとしてはあまり役立たない」(Mehrling 1997, p. 41)ものであった。

【Ely 1923】のなかに、一般的な物価変動のプロセスについて言及している文章があるので、それを引用しておこう。ただし、次の引用文の前段で、外国貿易を行わない、しかも銀行の存在しない閉鎖的な想像上の共同体が想定され、この共同体で突如退蔵されていた金が貨幣として流通へ追加された場合に、物価は如何なるプロセスを経て上昇するかが述べられていたということをつけくわえておく。

「現実の生活において一般的な物価の変化が起きる状況は、遙かにもっと

複雑である。だが、その基本においては、まさに今略述してきたものと本質的に異なると考えるべき理由は存在しない。しかしながら、貨幣供給の追加は通常はまずは銀行準備に仲間入りするという違いが存在する。その直接の結果は、割引率を低下させることになり、そして借入をよりたやすく行えるようにすることである。銀行貸付の増加は、より多くの銀行預金の増加を生み出し、それに見合っ、銀行小切手を振り出すその能力という形態での目前の購買力は増加する。物価は上昇しなければならないし、このことがより多くの額の貨幣を直接流通へと引き出す。物価上昇のために、ひとびとは『ポケットマネー』として手許にいくらかより多くの貨幣を維持する方が好都合であると気付くであろう。最後に、新たな攪乱要因が生じなければ、銀行準備にある貨幣量と直接流通にある貨幣額の間には均衡が実現するであろう。」(Ely 1923, p. 297)

上の引用文は、現実の社会での、すなわち銀行制度下での貨幣供給を原因とする物価上昇のプロセスが、極めて抽象的な次元においてではあるが、問題とされている。それにしても、銀行の存在しない共同体における物価上昇のプロセスと本質的には相違はないという。ただし、現実の社会では、貨幣、すなわち金の追加はまずは銀行準備の増加をもたらし、つぎに、銀行の貸付行動を媒介に、預金通貨の増加という形態をとって貨幣供給が追加されるという点が基本的に異なるという。

さて、引用文の内容について、改めて解説を加える必要はなかろう。一点だけ触れておけば、銀行による新規購買力の供給が既存の貨幣と競争的な需要関係にはいり、一般的な物価水準を上昇させ、逆にこの物価上昇が直接流通に必要な貨幣量を増大させることになる、そしてまたこの「増大がより高い物価水準を支え維持するのに役立つ」(Ibid., p. 297) ことになるという具合に、貨幣供給と物価上昇の間の因果関係は必ずしも一方的なそれではないということである。

ここで注意すべき点は、引用文は一般的で抽象的で、しかも長期的なプロセスについての言及である、ということである。すなわち、「金産出の変化に伴う

物価の一般的変動は、通常はかなり長い年月を通じた安定的な上昇傾向または下降傾向という形態をとることになる」ということである。だが、すぐに続けてヤングは次のように述べるのである。物価の「ゆっくりした揺れ」と極めて対照的なものが、「交換手段量の裁量的な膨張と収縮によってもたらされる激変」(Ibid., p. 302)である、と。ここで言及される交換手段とは「政府紙幣 (paper money)」のことをさす。現代においては金貨はそのような裁量的操作に服さないであろうが、「政府紙幣」は政府の裁量に服することから、たとえば戦争時など、その異常な増発によって急激な物価上昇を経験してきた、と指摘する(Ibid.)。

問題は、このことに加えて、ヤングが、銀行信用と政府紙幣の類似性を指摘して、「基本的なところで、インフレーションの現象は、インフレーションが政府紙幣の創造を通じてもたらされようが、銀行信用の拡張を通じてもたらされようが、同じである」(Ibid., p. 306)と述べていることである。銀行信用の拡張それ自体が裁量的であるということであろうか。「支払約束」である銀行信用の供給は究極のところ本位貨幣たる手許準備金によって制約されざるを得ないであろうが、その枠内であれば、「銀行は何らそれに先立つ貯蓄が存在しなくとも、産業と貿易に前貸しができる」(Young 1928c, p. 796)制度である。しかも、「流通界にある貨幣額は、追加貨幣所得がどの程度銀行借入によって創造されるかによって、左右される」(Kaldor 1990, p. 79)のであって、その結果、「生産一般はある時には貨幣所得の拡大を上回り、またある時にはそれと歩調を合わせては増加できない」(Young 1929b, p. 580)という状況も起こりうるのであった。

ここで、確認のためにみておくと、銀行信用の供給が裁量的でありうる理由、またはそれを可能ならしめる条件について、次のような指摘が見受けられる。

「支払いの際の小切手使用の普及は実質的に貨幣供給の増加に類似したものである。それは、直接流通にある貨幣との関係で、銀行準備にある貨幣のレシオを高める、それ故に M に対する M' のレシオを高める。もしたのファクターによって相殺されないならば、これは物価の上昇を伴うであろう。銀行業における組織の改善は、総銀行預金に対する総銀行準備のより低い標準レシオを可能にすることから、必然的に物価を引き上げる傾向

がある。」(Ely 1923, p. 296)

言い換えれば、銀行制度のもとで発展してきた貨幣流通上の技術と一体化して預金貨幣が普及し、その別の側面として銀行準備の流出が阻止され、さらには貨幣用金の集中が進むということであろうか。

「銀行業という制度は信用 (*credit*) と債務 (*debts*) がお互いにバランスされそして相殺される決済センターを提供する」(Ely 1923, p. 262) ものである。しかしながら、決済システムによって完璧に相殺がなされることはないことから、銀行はどうしても手許準備を保有せざるをえないであろう。その場合にも、「直接かれらの準備を引き出すことなくそしてしたがってかれらの信用を膨張させるパワーを引き下げることなく、貨幣に対する需要を満たすことのできる方法が存在する。それは銀行券の発行によってである。」(*Ibid.*, pp. 269-270) これは、個々人の信用に基づいて貨幣として機能する銀行預金よりも、より社会的組織としての銀行の「支払約束」である銀行券はその通用力が高いということによるであろう。このようにして「かなりの程度で、貨幣での支払いを行う必要性は、最終支払いでも、取り除かれる」(*Ibid.*, p. 262) ことになる。逆にその分だけ、銀行制度全体として準備率の引き下げが可能となり、その貸付余力は強化され、よって M' の膨張の余地は拡大することになるという理解であろう。

もっとも、 M' はその膨張の余地が与えられるにしても、現実にはその膨張は銀行の貸付・投資行動という裁量に服さざるをえないということが、また看過されるべきではなかろう。このことは経済主体の行為に係わる問題であると言い換えてもよいであろうし、しかもその行為は均衡を生み出す単に媒介的な役割しか担わないと想定されるようなそれではなかろう。ヤング自身この点を視座に入れていたことは、景気回復期における銀行の投資・貸付行動や企業家の潜在的市場にかんする判断という行為に極めて重要な地位を与えていたことから、窺い知ることができるのである。

とするならば、先の一般的な長期的な物価変動のプロセスを説明する議論は、景気循環を課題とする短期的な物価変動のプロセスの説明にそのまま適用することにはできないであろう。すなわち、改めて、短期的視点から、交換方程式

がよって立つ諸要素に関する前提それ自体が問われるべきであろう。この点について理解しようとする場合、ヤングの利子率の変動に関する指摘が示唆に富んでいるようにも思われる。すなわち、「パラドックスではあるが、利子率のふたつの顕著な特徴は不変性と変動性である」と指摘した後、利子率の変動の長期的「不変性」は「待忍」、「時間選好」といわれる「人間性の明らかにかなり一定した要素」に求められるべきであるが、他方、その短期的「変動性」については景気循環との関係で生じるということが理解されるべきである、と指摘するのである (Ely 1923, pp. 509-510)

交換方程式を構成する諸要因は、共同体の「習慣や風習」、「法律」、「経験」などの制度的諸要因によって経済主体の行為は制約されると前提されることから、変動という観点から捉えた場合、「限定的」なものであった。しかしながら先の引用文は、同時に、一時的には変動的でありうることが指摘されていた。たとえば、貨幣量の増加に対して、 T は中立的でなくて、貨幣量の増加を原因とする物価上昇とともに、 T は増加するという指摘がなされたり、また V も一時的には低下することになる、と述べられていたのである。

だが、ヤングの関心の中心は、変動要因のなかでも、とりわけ M と銀行準備の量的配分関係、そしてまた銀行準備と M' の間の関係にあった、と理解してよかろう。いわゆる、「銀行信用量の不安定性」という問題である。たとえば、不況期の「余剰準備」の顕在化という指摘がこのことを端的に示しているであろう。また銀行準備と M' の間の量的比率について述べれば、それは借り手側の事情の影響を受けないわけではないが、同時に銀行の主体的または裁量的な行動の影響下にもあった。すなわち、ヤングは、短期的には、または景気循環の過程では、銀行制度からの準備の流出や環流のために M と銀行準備の量的配分関係は大きく変動し、また銀行準備と M' の量的関係も大きく変動しうると理解していたのである。

以上のことを念頭におきながら、ヤングの関心事であった短期的な相対価格の変動のメカニズムの問題に話しを進めていこう。しかし残念なことに、かれは、この点については具体的には触れてはいない。ただし、回復期から拡張期にかけての、物価上昇と銀行信用の間関係については、次のような記述はみ

られる。

「回復は拡張へとそして拡張はインフレへと進む。このことは現代の銀行業の作用の下では不可避であろう。ビジネスの回復を伴うより高い物価は一定量の取引をファイナンスするためにはもっとドル(*more dollars*)を必要とするであろう。そしてより高い価格はより大きな貸付を銀行が認めるのを可能にするであろう。その理由はビジネスマンの売りは、ドルをタームにして、より大きいであろうし、そして彼の借入が何であれ返済する彼の能力はそれに応じてより大きいからである。

したがって資金は信用の新規のそしてより大きな前貸しによって利用が可能となる。これらは、次に、取引及び生産の支出の形態で支払われ、消費者の手に渡る。増加した消費者の購買は再びより大きくなり、そして価格、銀行貸付、ビジネス操作、消費者所得、そして消費者購買全てが一緒に増加する。原因と結果のようにお互いに絡み合い、何らかのこれらのひとつの要因の増加は不可避免的に他の増加に結びつく。そしてビジネスは安全なポイントを超えて拡大しそして増加し続ける。」(Young 1924d, p. 5134. イタリック—原文)

内容の解説は控えるが、ここには、特定の要因を与件とすることなく、全体として接近されており、そして個々の要因は、他の要因の影響を受けると同時に影響を与えるというように、相互作用の働きで、累積的に拡張するプロセスが描かれている。しかしながら、「ヤングの考えでは、景気循環という現象の背後に結局横たわっているのは相対価格のねじれであった」(Mehrling 1997, p. 42) とするならば、この点については、残念ながら、この引用文からは読みとれない。そうではあるが、この点については、次のような記述が参考になるのではなかろうか。

「貨幣量の増加がどのようにして物価上昇を引き起こすことになるのかは、容易に理解できる。この問題を理解するための最も単純な方法は、ま

ず第一に、貨幣のどの一片も誰かの所有物である、ということを理解することである。貨幣のどの一片も、政府、銀行、企業、および個人の所有物であろう。ある国の貨幣ストックを抽象的な総量として、または気候とか景観のように、特定のひとには属さないものとして、考える代わりに、貨幣ストックは非常に多くの個人の間で分割されている、と思い描いてほしい。貨幣の保有者にとって、貨幣は購買力である。特定の個人の購買力を増加させることなく、その国の貨幣のストックを増加させることは恐らくできないであろう。

富の年生産が増加しない一方で、より多くの量の購買力が使用されるならば、物価が上昇するのは避けがたいであろう。新規のドルは既存のドルの競争相手として市場に入ってくる。ドルは、その所有者が本国の産業の生産物を求めて競い、そして彼らの間でそれを配分するための手段である。もし、商品量に変化のないまま、増加せられた購買力が現れたら、物価上昇は必ず生じることになる。それ故に、より多くの数のドルが存在するだけでなく、より多くの数のドルが商品に費やされるであろうから、貨幣量の増加によって、貨幣の様々な価値は下落することになる。」(Young 1924d, pp. 5126-5127. イタリックー原文)

ここでは、交換方程式に基づいた一般的な物価水準の変動は問題とされず、個別的な価格の変動が問題とされている。その場合の切り口が、特定の個人の購買力の増加なくして、貨幣量の増加はありえないという指摘であろう。当然に個人個人の欲望、よって需要の内容は異なるであろう。しかもそれを実現させる個人個人の貨幣所得にはそもそも格差が考えられるであろうし、また後ほどみるように、景気循環の過程ではかれらの間での貨幣所得の分配には変化がみられることになる。これらに基づいて「相対価格のねじれ」を考慮するならば、異なる欲望をもつ個人個人が、それぞれ異なる量の購買力を携えて、しかも消費内容の決断においては購買力の量にその都度強い影響を受けつつ、商品市場に現れると考えられているように思われるのである。

これらを考慮しつつ、【松尾 2002】で見た、「貨幣所得のフロー」に絡めて、

われわれなりに解釈してみるならば、追加貨幣、具体的には増加した銀行信用は、企業家の生産的支出を介して、利子、賃金、地代、監督者賃金などの貨幣所得へと分割されることになろう。そして個々の貨幣所有者、すなわち消費者達は自らの欲望を充足させるために、商品一般に対してではなくて、特定商品の購入の見返りに、購買力としての貨幣を手放すことになる。その場合に、この貨幣の価値または購買力は個別商品との関係で表現されるから、貨幣の購買力は、特定の商品への需要という形でより多くの貨幣が支出されることになれば、その特定の商品との関係では、下落する。換言すれば、その特定の商品の場合には、他のそうではない商品の価格との関係で見れば、その価格は相対的に早いスピードで上昇するということになろう。また逆は逆であろう。このようにして繁栄期には、これらの貨幣の異なる価値または購買力は絶対的に一緒に変動しないということに、表現をかえれば、この商品価格は隊列を組んで上昇するのではなく、「落後兵と脱落兵」とともに「前衛」が常に存在するということになる、ということであろう。

それにしても、そもそも、何故に「相対価格のねじれ」が問題となるのだろうか。資本主義は、計画経済ではなくて、ある意味では「無計画」(Young 1924g, p. 3512)であることから、投資は企業家達の「潜在的市場」にかんする判断によって決定されざるをえないということ、そしてこれは需要との関係でうまく調整されえないということが、その理由である。この点について、つぎのようにいう。

「今日の資本投資は、それが成功裏であるかぎり、資本の生産物に対する共同体の需要を通じて、共同体全体によって実際のところ統治されまたは支配される。ある意味で、共同体は、これこれのものが生産され、そして資本はこれこれの形態で創造されるべきであると『投票する』。しかし共同体が投票の際に用いる投票用紙は共同体が消費財に支出するドルである。

この種の投票においては、個々の投票者の権力 (power) は、かれが保有するドルの額によってはかられる。富裕なひとは不釣り合いな影響力をも

つ。このシステムには疑いのない弊害 (evils) とあからさまな浪費が存在するのである。」(Young 1924g, p. 3512)

ここで指摘される「弊害」や「浪費」は、長期的観点に立っての、ないしは一定の価値判断に基づく経済社会のあるべき姿を基準としての指摘であるようにおもわれないわけでもないし、またそのための政策的余地を示唆しているようにもおもわれるが、しかしながらこのことは短期的な視点に立った場合でもそれなりにいえることであろう。とくに恐慌とはまさに弊害であり浪費であったからである。

本稿の中心的課題は弊害を生み出すメカニズムの解明であるが、このことを具体的に理解するためにも、まずは視点を需要サイドから供給サイドへと移して、企業家による「利潤」の実現、それに基づく再投資、そしてそれらと銀行信用の関連について、触れておく必要がある。

1.2 「利潤」の実現、再投資と銀行信用

ヤングは、総取引量 (T) が貨幣供給の増加または価格の変動に対して中立的であるとは考えない。拡張期の物価上昇は、企業家の「潜在的市場」にかんする判断に基づいた生産活動を「利潤」の実現・増大というかたちで正当化することから、自ずと供給の増加を伴わざるをえないし、また総取引量の増加が「利潤」の総量をおそらくは増大させることになるであろう。

だが、かれにとっての問題は、「増加する利潤が、ふたつの異なる方法で、ビジネス活動の過大な拡張 (over-expansion) に導くことになる」(Young 1924d, p. 5134)ということである。すなわち、「まずはじめに、これらの増加する利潤のかなりの部分は、もっと大きな収益の基礎となるであろうと期待される事業の拡大に再投資されるであろう。第二に、しばらくは、利子率は利潤率に遅れるということである。銀行からの資金の借入によって、または社債を発行し、市場で販売し、そして事業の拡大にその手取金を投資することで、金を稼ぐことができる」(Ibid. イタリック—原文)、ということである。

後者については、銀行信用が直接的または間接的に関係していることを容易

に推測できるであろう。企業家の手許にある「利潤」や、賃金、地代、そして利子という形態の貨幣所得に由来する貯蓄が存在するが、「これらの形態の所得が貯蓄される限り、それらは生産的充用のために企業家に直接、または貯蓄機関を媒介して貸し付けられる」（Ely 1923, p. 508）ことになるからである。だが、これは極めて抽象的で静態的な議論であり、必ずしも景気循環過程における利子率の上昇を契機とするような、それではない。この点については後で触れる。

他方、前者については、「利潤」の再投資の問題であるから、銀行信用とは直接的には関係ないようにおもわれるかもしれない。しかしながら、具体的に掘り下げてみると、短期的には、「利潤」の実現、その増加との係わり合いで、銀行信用が極めて大きな役割を担っていると、ヤングが理解していたことがわかるのである。それ故に、以下では、この点を中心にみてみようとおもう。

その前に、「利潤」概念について、確認しておこう。かれは一般的にはこの概念が曖昧に用いられていると指摘した後で、「経常利潤 (ordinary profit)」、「事業利潤 (business profit)」、「最低利潤 (minimum profit)」、「純利潤 (pure profit)」という4つの利潤概念について、説明する。すなわち、「経常利潤」は、企業家の貨幣所得とこの所得を得るための実際の支出の間の差額であって、「監督賃金」、地代、利子を含む。「事業利潤」は、アメリカで議論の際に一般的に用いられる言葉で、「経常利潤」から企業家の「監督賃金」を控除した残りの部分を意味する。他方「最低利潤」は、「監督賃金」、地代、利子の集計額に等しく、これと「経常利潤」の差額が「純利潤」となる (Ely 1923, p. 514)、と。

ところで、このような概念区分に従って、先に述べた投資ファンドの最大の源泉としての「利潤」を解釈するならば、それは、時として企業家が土地や資本を保有することから「事業利潤」を意味し、そしてまたそうでない場合には「純利潤」を意味するであろう。だが、このような概念区分を前提にしながらも、ヤングが記述において特定の概念を一貫して用いていないことから、以下の論述では、われわれもそれに倣うことにする。

それにしても、ヤングにとって、そもそも「純利潤」概念が、経済学的範疇

として、独自の概念でありうるのかが問われるべき問題でもあった。なぜならば、いわゆる資本—利子、労働—賃金、土地—地代という関係が存在し、それらは「契約と同意」に基づいて支払われるべきものであるが、「純利潤」は「契約と同意」に基づかない支払であるからであった (Young 1928d, p. 931)。だがヤングは、生産における独立したファクターとしての「企業」によるこの「第4番目の分け前」(Young 1928d, p. 927)の取得は正当化されるべきである、と主張する。そして、個別的短期的観点と社会的長期的観点というふたつの観点から、社会分配分との係わりでその内容を問いつつ、その根拠を述べる。

「個別の企業家の見地からすれば、私的所有と企業心 (enterprise) のシステムのもとでは、純利潤は生産費の特に必要なそして基本的な部分であるように思われるであろう。リスク、不確実性、責任。これらは不効用であり、これらの引き受けに対しては、何らかのかたちでの支払いが避けがたいであろうと思われる。しかし、最も重要なことは、純利潤が得られるべきであるということよりも、それが得られるという可能性を秘めているべきであるということである。賞を巡る最も熾烈な競争を誘発するために、それぞれの競技者が賞を受けるべきであるということにはならない。社会的観点から考えると、社会分配分の分け前として、純利潤はおそらくは正の量としては存在しない。全体では、社会はおそらくは、企業家に最低利潤の公平な評価として見なされるものに何らの追加も支払うことなく、かれらのサービスを手に入れる。しかし、純利潤を手に入れる機会が、かれが生産物のために確保できる価格を下回って、かれの生産費を維持したこととたいする、起こりうるそして正当な報酬として、個々の企業家のために確保されなければならない。」(Ely 1923, pp. 518-519)

まず「純利潤」が発生する根拠についてであるが、そもそも「完全に定常的そして変化のない経済秩序では、資本の異なる利用のそして限界能力の利点は競争によって完全に平等化されるので、純利潤は存在しえない」(Young 1928d, p. 931) のである。裏返して述べるならば、「純利潤」が存在しうるのは、「リ

スク、不確実性、責任」という概念に示されるように、その背後にある社会の変化、時間や空間を介在させる不完全な競争、不完全な情報、必ずしも合理的とはいえない経済主体の行動などが前提となっているということである。たとえば、【Kaldor 1990】では、「現実の世界では、社会が変化に晒され、そして競争は完全には作用しないことから、利潤が発生する。静態的な社会のように、完全な調整は存在しない」（Kaldor 1990, p. 106）と記述されている。このような意味で、「純利潤」概念は、ヤングの経済社会像とそれに対する接近視角のあり方を映し出す鏡である、と言い換えてもよからう。だからといって、競争の不完全性が度を超して強調されるべきではなかろう。なぜならば、後述する内生的成長理論を携えるヤングにとって、「競争の不完全性よりも競争の強さ」（Sandiland 2000, p. 318）が強調されるべき点であったと思われるからである。

次に「企業」という「組織」が取得する「第4番目の分け前」、すなわち「純利潤」の正当性について傾聴するならば、「長期的」「社会的観点」から、「社会分配分」との関連で捉えると、本来は「純利潤」は「社会分配分」への「請求権」を構成するものではないという。もしある企業家が洞察力や運などによって「正」の「純利潤」を取得するとするならば、それは他の多くの不運な企業家の損失、すなわち「負」の「純利潤」を意味するかもしれないのである。しかし、ヤングは企業家による「純利潤」の実現が決して否定されるべきではないという。「私的所有と企業心のシステム」である資本主義経済のもとでは「不確実性」と「リスク」を企業家は避けて通れないのであるから、それをあえて引き受ける「企業心」をもつ企業家にとって、「得られるという可能性を秘めているべき」「正当な報酬」であるべきであるとして、積極的に評価するのである。

と同時に、ヤングは、現代社会においては、この「純利潤」が蓄積ファンドを構成していると理解し、そしてこのことを強調するのである。

本来、投資ファンドの源泉としての貯蓄は、基本的には賃金、地代、そして利子の控除部分に由来するもので「待忍」に基づく部分である。そしてこれらの貯蓄は、直接には証券市場を通じて、または間接的には銀行や貯蓄機関を介

して、企業家に貸し付けられることになる。しかし現実には、「最も重要な投資ファンドの源泉、そして最も重要な投資形態は、かれの投資を全体としては変わらないように維持するために、かれの粗所得の大きな部分を、そのビジネスにつき込むという企業家の習慣的な行為に見いだせる」(Ely 1923, pp. 506-507)と理解する。しかも、「かれがもし望み、そしてもし可能であるならば、それ以上のことを行うことも自由である。すなわち、彼の利潤—かれの必要な支出および正常な支出を越える彼の粗所得の余剰—から、かれの投資を増加させるために、抽出される」ことになる。現実的には、「利潤に由来する貯蓄は資本財ストックに追加されることになる」というだけでなく、「事業利潤は今日新規投資ファンドの単一としては最大の源泉」(Ibid., p. 507. イタリック—原文)を構成していると述べるのである。

だが、ここで注意されるべきは、「事業利潤」または「純利潤」は、運動の過程をぬきにしては実現されえないもの、すなわち「現代のビジネスの活発な(active)プロセスに由来する」(Young 1924g, p. 3513)ものであるということである。加えて繁栄期には「事業余剰金は一般的基金である利用可能な貯蓄よりも急速に増加する」(Young 1927, p. 72)ということである。ちなみに、「法人組織の事業では、これらの事業貯蓄は、法人余剰金(*corporate surplus*)、すなわち配当として配分されない収益として現れる」(Ely 1923, p. 507. イタリック—原文)ことになる。

以上のことから明らかなように、企業家を実現する「純利潤」は、本来は「社会分配分」に対する「請求権」を意味しないとはいえ、不確実性ないしは不完全競争を与件とした企業家の洞察力等に由来する「正当な報酬」である。その限りでは、それは、銀行信用とは何らの結びつきもない。だが、結論を先取りすれば、景気循環過程において「純利潤」は銀行信用と不可分の関係にあり、「貯蓄よりも急速に増加する」理由も、実は銀行信用の膨張が根拠となっていたのである。以下では、この点について取り上げるが、ここでは、先に述べていた景気循環と関連した利子率の短期的「変動性」という指摘を導きの糸として、みてみよう。

これまでの議論では、われわれは、貨幣所得者の貯蓄行動および銀行の主体

的で裁量的行動については捨象してきたが、以下では、経済主体の行動と利子率の変動も視野に入れて、議論しよう。この点に関しては、先に指摘したことであるが、ヤングは、利子率の変動について、長期的には「人間性の明らかにかなり一定した要素」に規定されることから「不変」的であるが、その短期的には景気循環との関係で、「変動」的であると理解する。そして短期的な利子率の変動について、具体的には、「一般的には利子率の動きは物価の動向にいくらか遅れるが、利子率は、物価の上昇期に上昇し、物価の下落期に下落する」(Ely 1923, p. 510)、と述べる。本節で対象とする経済活動の繁栄期においては、利子率は傾向的に上昇すると理解できる。ついでに、物価と利子率の動向の時間的ズレが指摘されているので、ここで一言付けくわえておこなうならば、ヤングは、他の経済的問題に比較した場合、この点はさほど重要ではないと理解していた。そして、実質利子率と名目利子率の乖離とその経済的意義を重視する I. フィンチャーを意識してか、「恐らく債務者と債権者の不満はあまりにも誇張されてきている」(Ibid., p. 317) と指摘しているのである。

それでは、何故に利子率は上昇するのであろうか。市場利子率は借り手と貸し手の間の需給によって決定されると理解していることから、まずは借り手側の事情に触れると、これまでの「利潤」に関する議論から明らかであるが、物価上昇期には、利子を含めての借入資本の借り手の返済余力は急速に高まるということがまず確認されるべきであろう。この点についてヤングは、次のように述べる。

「一般的には物価上昇は利潤を増加させる。よって企業家達は、さらに多くの投資ファンドの供給を確保するために、より高い利子率を支払おうとすることになる」(Ibid., p. 315)、と。ちなみに、企業家が個人的組織というよりは法人(corporation)に属する場合には、3つの資金調達の方法が存在しており、ひとつのは、配当支払い後の留保収益であり、その他には、銀行の前貸しによる短期資金調達、そして社債の形態で自らの利付き債務の発行と個人、銀行、保険会社、そして他の金融機関への販売による長期資金調達が存在した (Ibid., p. 496)。

他方、資金の供給側に目を向けると、個々人の貯蓄の動機は、単なる貯蓄欲から、たとえば、住宅保有の夢、病気や事故への備え、老後の生活、子供への遺産への関心まで、多種多様である。しかしながら、「利子率の上昇は、より多

くの人々の貯蓄を促すことになり、そして他の人々には貨幣所得のより大きな部分を貯蓄させることになる」(Ibid., pp. 494-495) という。そして、このように利子率の上昇に伴って増加した貯蓄が、証券市場で直接的に、または銀行やその他の金融機関等を介して間接的に、借り手に供給されることになる、と理解する。

すなわち、一方では、繁栄状態にある産業または企業の利潤がかれらの返済余力を高め、それを根拠にしたより高い利子率の提示が長短資金調達を実現することになるが、他方では、提示される高い利子率に誘発されて、消費者の既存の貨幣所得のうち最終消費財やサービスへ支出される部分は抑制され、その分より多くが貯蓄にまわされることで、企業家によるより大量の資金調達を可能ならしめることになる、と指摘される。このように、利子率は、最終消費財およびサービスへの支出と貯蓄＝投資の間の割合に影響を及ぼす決定的変数であると理解されるのである。

だが、ヤングにとって、問題はこれで終わらない。銀行制度の下では、「利子の一般理論はある修正が必要となる」(Ibid., p. 510) という認識があるからである。貯蓄は、本来、「待忍」に基づいて貨幣所得から控除された部分であり、その限りで「自発的貯蓄 (voluntary saving)」(Ibid., p. 511) であった。ところが、銀行制度は投資ファンドの供給において独自の役割を果たすというのである。次の文章がそのことを示す。

「ある国の銀行システムの全般的組織が利用可能な銀行準備を基礎にして信用構造を築くことができるその程度と共に、銀行準備として利用できる貨幣額は、自発的貯蓄額と同じぐらい、投資ファンドの供給額を決定する際に重要であるように思われる。」(Ely 1923, pp. 510-511)

この点については、前のところでも触れておいたので、その内容については、くり返さない。結論だけ述べるならば、そもそも「銀行は貸し手(預金者)と借り手の間の仲介者以上のものである。」すなわち、歴史的過程を経て発展してきた銀行制度を与件とするならば、その場合、銀行の貸付能力は、準備率と現

実の手許準備額によって、制約を受けるにすぎない。支払い能力以内ならば、すなわち手許に「余剰準備」が存在するならば、「銀行は何らそれに先立つ貯蓄が存在しなくとも、産業と取引に前貸しを行うことができる」のである。むしろ、個々の銀行にとっては可能な限り最大のビジネスを行うことに、そして株主のために最大の利潤をあげることに関心があることから、個々の銀行は、利子率の上昇という状況下で、与信能力を最大限活用することになると理解して良からう。その結果は、「自発的貯蓄」に基づかない、しかも銀行の裁量に基づく、銀行による強制的な投資ファンドの創出ということである。かくして、ヤングにとっての「銀行業の本当の意義は実際に貯蓄を生み出すメカニズムを根底から変える」(Ibid., p. 511)ということにある。以下が、そのメカニズムである。

「事業利潤は投資ファンドのうちで最も重要な資金源である。物価が上昇し、そして利潤が増加するときには、国民所得の相対的に大きな部分は現時点の満足に費やされるよりは資本財に投資される。このことは、そのような時期にひとつの階層としての企業家たちが『貯蓄』によって異常に大きな犠牲を払っているということの意味しない。全く反対である。そのような時期に生じる消費の削減は非常に大きくは他の階層で起きる。高い物価は、それによって貯蓄の負担が消費者全体に行き渡るメカニズムである。そしてその負担がどのように振り分けられるかは、異なる階層の消費者の貨幣所得が価格の上昇によってどのように影響を受けるかに左右される。ちょうど政府の要請による貨幣的インフレーションが偽装された形態の課税を意味するように、銀行信用の循環的拡張は偽装された形態の非自発的貯蓄を意味する。」(Ely 1923, p. 511)

最初のところで「増加する利潤は、ふたつの異なる方法で、ビジネス活動の過大な拡張 (over-expansion) に導くことになる」と述べておいたが、この引用文から、不完全競争を与件とした企業家の洞察力等に由来すると思われた、しかも最大の投資ファンドを構成する「純利潤」、例えば法人組織の「法人余剰金」

は、銀行信用の循環的拡張による「非自発的貯蓄」に関係しているということ、しかも銀行信用の循環的膨張によって消費者全体に強制された貯蓄に関係しているということ、理解できるのである。

景気循環のどの段階で、銀行は「自発的貯蓄」の「仲介者」としての役割を越えて、「非自発的貯蓄」を消費者全体に強制する立場へと変身することになると理解するのであろうか。それともそもそもつねに「仲介者」以上のものであるということであらうか。この点に関しては、われわれは今のところ必ずしも明確な解答を持ち合わせていない。ただし、銀行信用の役割を資本の蓄積と絡めて捉えかえすならば、次のように理解できる。すなわち、長期的視点に立つならば、結局のところ、「銀行信用の供給増加は、他の形態の購買力の増加と同様に、より高い物価に吸収される」運命にあるであらう。しかしながら、短期的視点に立つならば、事情は異なる。「銀行業は、現在そうであるように、おそらくは資本が蓄積される度合いを加速するという正味の影響力 (net effect) を持つ」(Ibid., p. 511) ことになるからである。

本節を締めくくるにあたって、この蓄積のプロセスに関するヤングの理解を示しておくならば、このプロセスは、均衡へ向けてのそれではなくて、「事実上、不安定な種類の (unstable sort) 均衡へ向けての傾向」が内在するそれであった。そしてその場合に、「人間性を一定とするならば」、「もっとも重要な変動要因」のひとつが、まさに「利子率」であったのである。そして、いまひとつの要因は、節を改めて取り上げることになるが、「資本主義的生産様式の経済」であった (Young 1928c, p. 796)。

2. 恐慌と銀行信用

2.1 「銀行信用量の不安定性」と銀行準備

本節では、ヤングは、何故にビジネスの拡張は恐慌という結果を招くことになると考えたのか、この点を問題にする。そこでまずは、銀行の役割に目を向けてみよう。

ヤングは、繁栄の崩壊には「ふたつの基本的理由が存在するように思われる」

(Young 1924d, p. 5134) と述べる。ひとつは「拡張期の経済的変化は量的であると同様に質的である」ということであり、単に生産および消費の量の変化だけではなくて、消費と生産構造の変化などが理由であるという。いまひとつは「銀行がかれらの資源を枯渇させ、そしてビジネスに対する前貸しを劇的に削減しなければならない」ことであるという。そして「疑いもなくふたつの理由のうちでより重要である」のは、後者であると指摘する (*Ibid.*, p. 5135)。そこでまずはこの点について傾聴しよう。これは「銀行信用量の不安定性」に係わる問題でもある。【Ely 1923】のなかには、次のような記述がみられる。

「預金の増加は準備率を引き下げる。貨幣は準備から引き出されて直接流通に入ってゆく。利子および割引率は上昇する。最終的により高い物価水準は、輸入を促しそして輸出を妨げることで、貿易収支を赤字へと変え、よって金は輸出されるであろう。銀行準備の減少は、信用の拡張がそしてそれとともにビジネスの拡張がそれを越えて進むことのできない限界をかくする。たとえ他の好ましからざる要因—穀物の不作のような—が介在しないにしても、繁栄の趨勢はそれがうち勝つことのできない障害に直面する。実際、準備は拡張が頂点に達した後もしばらくは減少し続けそうである。このこと自体が通常は銀行信用の収縮を強制し、事業計画及びプロジェクトに悲惨な結果をもたらす。」 (Ely 1923, p. 329)

この引用文からは、銀行準備の枯渇が銀行信用収縮の要因であり、またこのことが恐慌の原因であるとも読める。そこで、改めて、銀行準備にそして準備率に影響を及ぼす要因とそのメカニズムについて、確認しておこう。

ひとつは、貿易収支が対外的要因として挙げられている。ヤングが、国際的な最終決済手段は金以外にはありえないと理解していたことを前提にすると、「逆転した貿易収支を相殺するためには、金が現送されなければならない。この金は銀行準備から来るし、さらに銀行の貸付能力を押し下げる。しばしば起きることだが、外国為替相場の弱含みへの転換は繁栄の時期がその終わりに近づきつつあるという最初の明確なシグナルである。」 (Young 1924d, p. 5135)

ヤングが、国際的な長・短資本移動の金移動に及ぼす役割を認識していなかったということではない。実際彼は、相対的に僅かな金準備しか保有しないイングランド銀行が機能している実状を把握しており、同行による金利の引き上げは、諸外国による長期借入を抑制し、また海外での調達を増加させ、その一方で短期資本流入を促すことから、金の対外流出を阻止するように作用している、と理解していた (Young, 1924e)。むしろ、かれにとっては、1920年代に見られた最終決済手段として金が激しく移動する状況こそが問題であり、正されるべき問題であったと述べるべきであろう。それにしても、残念ながら、国際的な金移動と景気循環との関係については、具体的には言及していないことから、以下では、国内的要因に、すなわち「貨幣が準備から引き出されて直接流通に入ってゆく」メカニズムに、【Young 1928a】を参考にして、傾聴してみたい。本書は、確かに統計書ではあるが、明らかにヤング自身景気循環を意識して纏めたものであり、景気循環論を構築するための歴史的事実に基づく帰納的試みである、と理解できるからである。

さて、【松尾 2002】で、第一次大戦前の国法銀行制度の下では、不況期から回復期にニューヨークの銀行の自己勘定による投資および証券市場での貸付は増加すると述べておいたが、その後のビジネス活動が活発化する状況下での、これらの貸し付けられた資金の流れは、つぎの通りであるという。

「このようにしてニューヨークで確保された資金のかなりの部分は、そこに長い間保有されることはなかった。支払は本国の他の地域の最終的な借り手に対してなされなければならなかった。預金はニューヨークの外部の銀行に移された。産業活動の回復は、これらの外部への支払と何らかの関係があったが、外部の銀行による貸付の増加に結びつくことになった。物価の上昇と小売り取引量の増加のために、貨幣が、外部の銀行を通じて、ニューヨークから流通へと引き出された。」(Young 1928a, p. 28. イタリック—原文)

ここで銀行準備の減少という場合、ふたつの内容が含まれる。ひとつは、ニ

ニューヨーク以外の銀行への貨幣の流出によるニューヨーク市所在銀行の手許準備の減少、いまひとつは、直接流通への貨幣の流出によるニューヨーク以外の銀行の手許準備の減少である。それにしても、銀行信用の変動に及ぼす影響という点で、重要な要因は、以下の引用文に示されるように、銀行の間での準備の配分のあり方よりは、むしろ直接流通への貨幣の流出による銀行制度全体の準備の減少であった。

「わたしの見解では、ニューヨーク内であれそれ以外であれ、銀行間の貨幣配分の変動が銀行信用の変動に及ぼす影響よりは、たとえそれが如何なる種類のものであれ、銀行と公衆の間での貨幣配分の循環的変動の方がより重要である。銀行は如何なる時でも他の形態の貨幣を法貨に交換することができる。それ故に、他の形態の貨幣は、銀行の保有部分より、流通している総貨幣の相対的により重要なシェアを構成した。銀行によって保有される法貨の額およびニューヨークの銀行とそれ以外の銀行の間でのその配分は、流通内外への貨幣の一般的移動によって決定された。」(Young 1928a, p. 24)

ニューヨーク所在の銀行とそれ以外の地域の銀行では、異なる要因が作用して、かれらの貸付・割引が増加していた。ニューヨークの場合には、直接流通にあった貨幣が不況期に銀行へ流入・滞留し、余剰準備として顕在化したからであるが、それ以外の地域の銀行の場合には、ビジネス活動が活発化したことがその理由であった。そして他の地域で活発化するにつれて、貨幣は内陸部へとニューヨークから流出していくことになる。その意味では、国法銀行制度下では、生産と取引の循環的拡張と不可分の関係にあったニューヨーク市以外の商業銀行の貸付と割引の膨張は、ニューヨーク所在銀行の手許準備を減少させることから、結果としてかれらのニューヨーク証券市場での投機と長期金融業務を犠牲にすることになった、といえるのかもしれない。

しかも、ビジネスの拡張にとって決定的と思われる、ニューヨーク市以外の銀行準備の減少の原因は、「物価の上昇と小売り取引量の増加」、「賃金の上昇」

(Young 1927, p. 70) および「雇用の変化」(Young 1928a, p. 65)によるものであった。それは、ひとびとが「ポケットマネー」として手許により多くの貨幣を維持することが都合がよいと認識するからでもあった。確かに、直接流通で必要とされる貨幣量が急速に増加する時に、銀行は銀行券を発行できよう。この点について、ヤングは、「銀行券での支払がかれらの準備への圧力を弱め、したがってかれらにとっては、さもないならばそうでなかったよりもより大きな量の貸付を行うことができる時である。通貨が必要とされているときには、銀行券を発行する能力は、法貨を準備に加えるパワーと同じぐらい銀行にとっては重要である」(Young 1928a, p. 26)と述べる。確かにそうではあるが、最終的には、直接流通との関係での貨幣の流出入が、銀行制度の下にある準備額およびニューヨーク市の銀行とそれ以外の銀行の間での準備の配分を決定する要因である、と理解していたのである。

このように、第一次大戦以前の国法銀行制度下の歴史的事実が示唆するところによれば、銀行準備と直接流通額との「一般的な相反関係は避けがたく」、そして「非常に重要なこととして、これらの相反する変動が継続的または休まない特徴」であり、「さらにこれらの移動は循環的特徴を持つ」ということであった (*Ibid.*, p. 23)。その場合に、産業活動の状況、とりわけ賃金と小売価格の上昇を基準とした人々の行動が原因で、銀行準備の減少はその結果であり、よって銀行は受身の立場にあったということである。

改めて抽象的に述べるならば、銀行の準備率は、国内的には、ふたつの要因によって、著しく悪化することになる。ひとつは、急速な産業の拡張とともに累積的に膨張する銀行貸付によるものである。それも決して、「銀行が直面する困難は、彼らに要求される貸付の質が性格的により貧弱になっているということではない。」(Young 1924d, p. 5135) 言い換えれば、貸付の内容の悪化によって返済が危ぶまれる状況が生み出されているというのではなくて、むしろ、銀行の「支払約束」である預金量や発券残高が急速に増加することによる、ということである。いまひとつは、これまで述べてきた貨幣所得の増加や物価上昇などによる直接的な銀行準備の直接流通への流出によるものである。これに、先に述べた、金の対外流出という対外的要因が加わることで、銀行の準備率は

いっそうしかも急激に悪化することになる。かくして、「銀行準備の減少は、信用の拡張が、そしてそれとともにビジネスの拡張がそれを越えて進むことのできない限界をかくする」ことになる。なぜならば、「法律またはかれらの通常の銀行業務上の深慮があらかじめ定める最低限に彼らの準備率が下落するから」（*Ibid.* イタリック—原文）である。これが結局のところは「通常は銀行信用の収縮を強制」することになる。すなわち、銀行は次のような対処的な行動をとらざるをえなくなる。

「かれらの準備率が最低限に下落するとともに、そして直接流通と同様に輸出のために現金が引き出され続ける状況に直面して、銀行は自己の貸付残高を劇的に減少させるほかに手だてはない。様々な借り手の間での不公平な差別を伴うことなくこれを実現するための最善の方法は、利子率および割引率を引き上げることである。よって最も必要な借入以外は停止されるであろう。この割引率の上昇が、認められるべきであるが、実際しばしば貸付のきっぱりした拒絶を一緒に伴い、ビジネスを突然のそして困惑させる停止へと導く。銀行は批判されるべきではない。もしかれらがかれらの貸付を引き締め始めてこなかったら、最終的な破局は先送りされるであろうが、かれらの準備の最後のペニーが流出し、破局はもっと破壊的なものであろう。」（Young 1924d, p. 5135）

銀行は「仲介者」を越えた存在である。もっとも、究極のところは手許の準備金が許す限りにおいてのみ、そのような存在でありえたのである。引用文が示すように、国内および国外への準備金の流出は、銀行に本来内在するあやうさを顕在化させ、そしてその地位を一変させることになる。準備率の低下に対処して銀行は金利を引き上げることになるが、これは決して批判されるべき行為ではない。だがその結末はビジネスの突然の停止であった。

以上見てきたことから明らかであるが、ヤングは「銀行信用量の不安定性」、より具体的には、銀行準備の枯渇を恐慌の原因として把握していたことを、われわれは窺い知ることができるのである。

2.2 「恐慌の銀行理論」批判

直接流通の外部への貨幣の排出・銀行への還流と銀行間での準備としての配分、そして銀行から直接流通への再度の貨幣流出は、まさに「現代の銀行信用メカニズムの不安定性」(Young 1928a, p. 28) にとって核心ともいうべき位置を占め、そしてまたこの不安定性こそは、ビジネス活動を時に牽引し、時にそれに従い、そして突然停止させる要因として作用するものであった。

だが、ここで改めて、恐慌の原因について、振り返ってみてみるならば、ヤングによってもうひとつ、すなわち、「拡張期の経済的諸変化は量的であると同様に質的である」という要因も指摘されていたことが、忘れられてはならないであろう。もし恐慌がこれを何らかの意味で原因とするということであれば、これは、銀行信用の不安定性が原因であるというこれまでの主張と、どのように関係することになるのであろうか。この点に配慮して、改めて【Ely 1923】を注意深く読んでみると、その表現は微妙であったのである。

「銀行は購買力を弾力的に供給する。すなわち、ビジネスの取引が増加するにつれて量を膨張させ、それから一購買力の供給は一定の点までのみ弾力的であることから一さらなる膨張はしばしば (often) 突然強制的に阻止される。」(Ely 1923, p. 328)

この引用文から、突然の銀行信用の収縮がビジネス活動を突然強制的に阻止するのは、「しばしば」起きることであるという。ところで、「しばしば」とはどういう意味であろうか。それは反復の規則性を意味するのであろうか。それとも必ずしも必然的ではないということの意味するのであろうか。われわれには、どうも後者ではなかろうかと思われてならない。その理由は、ヤングが、産業の拡張が常に銀行準備の枯渇を原因として恐慌に至るとは考えていなかったからである。この点については、つぎの引用文が参考になろう。

「これらの循環的揺れ (swings) は、いったん起きると銀行の準備が使い果たされるまでは、決して終息しないと信ずべき理由はない。貨幣的諸要

因は疑いもなくビジネス活動の循環的変動（fluctuations）とおおいに関係している。さらに、それらはそのような変動が越えて行けない限界を設ける。しかし例外的な規模（magnitude）での循環においてのみ、実際そのような限界は効力を発揮する。比較的多くの数の循環的変動はうまくこれらの限界内に維持されている。恐慌は、すべての循環でおきるのではなくて、その極限に至るか、または近づく循環にとってのみの出来事である。」（Young 1928a, p. 28）

ここには、循環的変動の内容がより具体的に問われるべきことが示唆されている。すなわち、循環的変動には必ずしも恐慌に至ることのない変動も存在することが示唆されている。だが、恐慌に至る変動の場合には、その原因はやはり銀行の準備の枯渇にあるように思われる。そして、銀行準備の枯渇を要因とする恐慌とは、「例外的な規模での循環においてのみ」生じうるといふ。

もっとも、この引用文は、戦前の国法銀行制度下での状況を踏まえての恐慌の原因に関するヤングの理解であったということ指摘しておきたい。そしてヤングは、国法銀行制度についてつぎのように評価していた。すなわち、「旧国法銀行システムは、その非弾力的そして窮屈な準備であり、そして集権的な責任あるコントロールを欠いていたことから、これらの点では特に悪い。疑いもなく、このことが、何故にアメリカでは他の国よりも経済恐慌がより頻繁でかつ厳しかったかを説明している」（Young 1924d, p. 5136）、と。それ故、かれは、弾力的な貨幣供給を実現すべく集権的な銀行制度へ向けての改革を主張していたのであった。

ところで、これを拠り所にして、われわれは、次のように解釈できるかもしれない。すなわち、ヤングは、銀行準備の枯渇が恐慌の原因であったから、弾力的な貨幣供給が可能な制度の下では、または集権的ではなかったが、それを実現すべく改革された連邦準備制度の下では、恐慌は克服され、それはもはや生じなくなると理解していた、と。この点について結論を先取りするならば、決してそうではなかった。ヤング自身これを否定する。すなわち、「繁栄は、銀行準備が枯渇するから、単にそうなるから、終わりに至る」（Young 1927, p. 70）

という理解は、「全く貨幣市場をタームとして景気循環を解釈する」(Ibid.) 人々の考え方である、と。そしてかれらを「恐慌の銀行理論 (the banking theory of crises)」(Ibid.)として括るのである。この立場を念頭において、ヤングは、「それはある景気変動のある側面をかなり正確に記述しているということに疑いはない。しかし、満足行く一般的な説明ではない」(Ibid. イタリックー原文)と述べて、逆につきのような疑問を突きつける。

「もし景気循環に関するこの銀行理論が全く適切であるならば、恐慌をなくすもっとも確実で、そしてもっとも簡単な方法は金本位制を廃止することであろう。もしこの見解が正しければ、不換の紙幣 (paper currency) によって、どうして拡張と繁栄に終わりが存在するであろうか。今日のヨーロッパの貨幣状況はうらやましく思われてしかるべき状況である。しかし事實は、われわれが知っているように、通貨の増加、信用の増加は、それとともに、ビジネスおよび産業をある地点を超えては推し進めないであろう、ということである。抵抗力または妨げるものも比例してますます増大する。インフレも崩壊を遅らすことができるだけで、崩壊は避けられない。」(Young 1927, p. 70)

同様な主張は【Ely 1923】のなかにもみられ、「銀行信用の循環的揺れは景気循環を説明するには十分ではない」(Ely 1923, p. 329)と指摘している。銀行準備の枯渇による銀行信用の収縮が恐慌の原因ではないという理解である。すなわち、当時の金本位制を離脱していたヨーロッパの国々を引き合いに出しつつ、貨幣供給が弾力的であろうとも、恐慌は避けがたいと述べているのである。これに絡めて述べるならば、確かにヤングは、ホートレーの「景気循環の純粹に貨幣的現象としての解釈」(Young 1924a, p. 349)を高く評価していたが、必ずしもそのような立場には賛同していなかったことが、むしろ批判的であったことが理解できるのである。この点については、【Kaldor 1990】が参考になる。

「あるひとが債権者に支払うことができるかは、明らかにかれの債務者が

かれに支払うことができるかによる。よって恐慌というものはいつでも信用ネットワークの崩壊によって生じるであろう。しかしそれでも、産業の条件がいくぶん緊張することがないならば、とくに膨張することがないならば、恐慌は存在しない。契約システムは、外生的 (extraneous) 原因がなくとも、すなわち、多くの原料供給、労働および銀行信用の供給が非弾力的であるということ、そして短期的にはある点を超えては拡張しえないということとは無関係に、単に内在的な (inherent) 過度の合併症によって崩壊するといえるようにおもわれる。」 (Kaldor 1990, p. 81)

ここでは、恐慌との関連でいえば、明らかに、資源や労働力の供給と同様に、銀行信用の供給も「外生的」であると述べられ、これもあくまでも「外生的環境」 (Kaldor 1990, p. 81) を構成するにすぎないことが指摘されている。なるほどこれらの外生的な要因が恐慌を引き起こすことがあるにしても、あくまでも産業の「内在的」「緊張 (strains)」 (Ibid.) を前提・条件にしてのことであると理解されているのである。

われわれはここに至って困惑せざるをえない。前節で見たように、ヤングは恐慌の原因としては銀行準備の枯渇が「より重要である」と指摘していたにもかかわらず、ここでは銀行準備の枯渇という「外生的」要因は恐慌の原因ではないと、明らかに矛盾する指摘をおこなっているからである。しかし、これはヤングの頭のなかでは必ずしも矛盾するものではなかったようにおもわれる。かれにとっての課題が「機械的」な景気循環のメカニズムの解明にあったとはいえ、それらは歴史的ないしは制度的要因と無関係には理解しえないというのが、ヤングの基本的立場であったようにおもわれてならないからである。このような解釈がゆるされるとするならば、ヤングが銀行準備の枯渇を恐慌の原因として指摘したのは、弾力性を欠く歴史的制度としての旧国法銀行制度を前提としての景気循環の理解に立ってのことであって、ヤングが敢えてこの点を「より重要である」と強調したのは、新たに創設された連邦準備制度に対する期待の裏返しであり、その意義を強調したいという意図がその背後に控えていたからである、と思われてならないのである。

2.3 貨幣所得の再分配と「調整の過ち」

ヤングによれば、繁栄は、「内在的である過度の合併症によって崩壊する」のである。言い換えれば、「産業の緊張がつねに必要であり、そしておそらくは恐慌の十分条件である。」(Kaldor 1990, p. 82) そしてこの「緊張」の諸形態について、【Kaldor 1990】では、次のように要約されている。

「(1)様々な調整の過ち (maladjustments)。

(2)様々な短期の非弾力性と不足。利潤は継続し、またはさらに増加するという期待のもとづいて、事業 (commitment) は試みられてきているであろう。しかし利潤は労働、原料または銀行信用の費用の増加によって搾り取られるであろう。これらは、もしそれらが一般的な期待に反しないものであれば、それら自体緊張の大きな要素ではない。

(3)物価上昇の状況では、さまざまな購買力の再分配が生じる。アメリカでのベリッジ (Berridge) の研究は平均賃金と被雇用者数を掛けたものが物価曲線とかなり一致していることを示唆している。すなわち、労働者の手中にある総購買力は産業の生産と同じような率で増加する。ここで重要である購買力の再分配は定収入 (fixed incomes) を受け取るひとびとに由来する。すなわち、消費者需要の変化が生じ、そして消費者支出の相対的な割合に、そして生産物への支出の相対的な割合に変化が生じる。このことは特に重要である。そのわけは、ビジネスの利潤のより大きな部分がさらなる拡張のためのファンドを供給するからである、そして利潤からの貯蓄のより大きな部分は必ずしも適切には支出されないからである。それは投資市場を探さないで、それを生産してきている繁栄状態にある産業に再びつぎ込まれる。表現をかえれば、繁栄状態の産業は、繁栄しているが故に、過度に取り引きされる傾向がある。」(Kaldor 1990, pp. 81-82)

以下、本節では、この(1)、(2)、(3)の指摘を踏まえて、それぞれの点を具体化するという形式をとりながら、ヤングの理解する恐慌の原因に接近してみ

たい。

まず、(2)については、既に述べた外生的要因であることから、ここではこれ以上触れない。ただ、「これらは、もしそれらが一般的な期待に反しないものであれば、それら自体緊張の大きな要素ではない」という指摘については、次の引用文からその内容を読みとることができるであろう。

「これらの要因（労働や原料—訳注）がどんなに重要であっても、しかしながら、それらは自ら崩壊をもたらすには十分ではない。なぜならば、生産の支出は、別の角度から見れば、貨幣所得であり、それらはその後に消費財または生産財に支出されなければならないからである。財一般に対する需要は、ビジネスの支出（outlays）が成長するのと同じぐらい早く、またはそれに近い早さで成長しなければならない。」（Young 1927, pp. 71-72. イタリック—原文）

つぎに、(3)の具体化を図るが、これが最も難解で困難な課題である。

急激なビジネスの拡張が崩壊に至る理由のひとつとして、われわれは既に「拡張期の経済的変化は量的であると同様に質的である」というヤングの指摘を示しておいた。その内容は、抽象的にいえば、「量的」側面としては、貨幣所得、需要、そして生産の量的増加であり、「質的」側面としては、貨幣所得分配の変化、需要構造の変化、そして生産構造の変化である、と理解してよい。このような理解に立てば、その内容は、明らかに(3)のそれと重なるものであろう。この点について、少し敷衍しておこう。

全体として貨幣所得は増加するにしても、拡張期の物価上昇を原因として、社会を構成するひとびとの間での貨幣所得、すなわち購買力は再分配される。物価上昇は貨幣価値の下落を意味するからである。もし物価上昇に貨幣所得の上昇が遅れるならば、実質所得は減少することになるであろう。「購買力の再分配」という言葉は、別な表現を借りるならば、物価上昇を契機としての「社会分配分」に対する「請求権」の再分配を意味する。それを失う立場のひとびとは「定収入を受け取るひとびと」である。具体的には、抵当証書と社債の保有

者、サラリー階級、教師、政府被雇用者であり、そして大部分の賃金労働者もそれに含まれる。その一方で「購買力」の配分をうけるひとびとは、農夫、鉱山所有者、および他の原料生産者達であり、製造業者であり、またそのような産業の株を保有する投資家達である (Ely 1923, pp. 331-332, Young 1924d, p. 5134)。

このような「購買力の再分配」、表現をかえれば、「急激な物価上昇期にともなう富の分配の突然の劇的変化」に加えて、利子率の上昇に伴う自発的貯蓄の増加、さらに「総所得の大きく増大した部分を構成するようになる」(Ely 1923, p. 332)「事業利潤」は、「最終財の市場だけでなく、また生産財の投資においても、重大な影響を及ぼす」(Ibid.) ことになる。なぜならば、貨幣による「投票」がなされるからである。物価上昇に貨幣所得の上昇が追いつかない階層が存在することから、「基本的生活必需品に対する需要の相対的減少」(Young 1924d, p. 5134. イタリック—原文) が生じることになると考えられるであろうし、他方では、利潤が増加するプロセスで、ふたつのクラスの商品に対する需要が増加することになるからである。まず、工場、機械等の資本財に対する需要であり、いまひとつは、新たな金持ち達が需要する贅沢品である。本筋からは離れるが、ここでひとこと付けくわえておけば、必需品への支出の残余部分の、贅沢品やそのようなサービスへの「貨幣の支出は、ソースタイン・ヴェブレン (Thorstein Veblen) が『顕示的消費』と呼ぶものを巡る張り合いの形態にすぎない」と理解してはならない。消費者は、それらが高価であるからそうするのではなくて、それらに何らかの真の価値を見いだすから貨幣を支出するのである (Young 1924h, p. 4103)。いずれにせよ、企業家達の視点から以上の点を捉える返すと、これらは市場の規模と内容の変化、すなわち有効需要の変化を意味するのである。

ところで、将来の最終消費財に向けての資本主義的迂回生産様式の特定の段階に位置する個々の企業家は、「潜在的市場」にかんして判断して、これに基づいて生産活動ないし投資を決断する。とするならば、上に述べたような市場規模の変化ないしは有効需要の変化は、供給と需要の間に何らかの摩擦を引き起こすことになりはしないであろうか。

まさにヤングの関心を惹きつけて離さなかったのがこの点であったということ
 を指摘しておいた。だが、問題はその接近の方法であった。そしてこの点に
 絡めて述べるならば、ヤングは、新古典派の分析装置が役立つと考えてはいな
 かったのである。

「経済的均衡を生み出す諸力、すなわち、例えば、如何なる時点において
 も接線の上を動く (tangential) ような諸力の分析は、この分野を解明する
 ためには役立たないであろう。その理由は、均衡から乖離する動き、それ
 以前のトレンドからの離脱が、その特徴であるからである。」(Young 1928b,
 p. 528)

かれは、経済社会のメカニズムには「均衡から乖離する動き」が内在してお
 り、よってそれは決して外部の環境を所与として数式を用いて解かれるような
 「均衡」ではないという。そもそもかれにとって、「収穫逓増 (increasing
 returns) のもとで均衡条件を探し求めることは、ありもしない大発見 (mare's
 nest) を探すに等しい」(Kaldor 1990, p. 45) ことであった。

それでは、経済社会は発散的であって、何らかの均衡へ向けての諸力は働い
 ていないと理解していたのであろうか。そうではなくて、たとえそのような力
 が働いているにしても、それを解明するための分析装置は存在しないと理解し
 ていたのであろうか。このふたつの点について、ヤングは次のように理解して
 いた。まず前者については、敢えていえば「移動均衡 (moving equilibrium)」
 (Young 1928b, p. 535. イタリックー原文) が適切な概念であると指摘している
 ことから、明らかに発散的であるとは理解していなかったことがわかる。そし
 てこの課題の解明には、交換方程式の理解に於いてもそうであったが、新古典
 派の分析装置とは異なって、対象は「一体 (togetherness)」として接近され、
 そして究明されるべきであり、そのための具体的分析装置は「相互需要
 (reciprocal demand)」の考え方である、と述べているのである。

ところで、われわれはすでに、繁栄期における「事実上、不安定な種類の均
 衡へ向けての傾向」の「もっとも重要な変動要因」のひとつが、「利子率」とと

もに、「資本主義的生産様式の経済」であるというヤングの指摘を引用していた。そこで、以下では、特にこの指摘を拠り所にして、恐慌という問題に絡めて、プロセスにおける生産と消費、または供給と需要の間の関係に接近してみたいとおもう。

まずは、「資本主義的生産様式の経済」の内容それ自体を確認しておく必要がある。ヤングは、次のことが「第1のポイント」(Young 1928b, p. 531)である、と述べる。

「収穫逡増に自らを表現する主要な経済は資本主義的または迂回的生産様式の経済であるということである。言い換えれば、これらの経済は現代の最も顕著な形態にある分業の経済とおおむね同一ものである。」(Young 1928b, p. 531)

ヤングの問題とする「経済」とは、あくまでも「収穫逡増」として現れるそれであって、「資本主義的または迂回的生産様式」を条件にしたコスト削減に係わるそれである。それは、個々の企業、およびその大規模生産に伴う、または個々の産業のみを視野に入れての「経済」ではなかった。かれが「分業の経済」と述べる場合も、社会的分業を強く意識してのそれであり、産業間の分業を基礎とした経済であると理解すべきであろう。ところで、この分業を制約するのが市場の大きさである。それ故に、「第2のポイント」は、「迂回様式の経済は、他の形態の分業の経済よりも、市場の広がり依存する」(*ibid.*)、ということになる。これらの点について、若干補足説明しておこう。

まずは、個別の企業組織の経済の問題に触れておくと、それは規模、機械化、そして専門化とも関係しよう。ヤングは次のようにいう。「重要なことは、分業とともにひとグループの複雑なプロセスは継続する、より単純なプロセスへと移行され、少なくともそのある部分は機械の使用に向いているということである。機械の使用と間接的プロセスの採用によって、分業がいつそう実現されることになる」(*Ibid.*, p. 530)、と。言い換えれば、「現代の大規模産業は職人を排除し、エンジニア、機械、そして機械オペレーターによって置き換える傾向

がある」(Young 1929a, p. 5390) ということである。確かに機械化は、働くものたちとの関係で無視できない問題を孕むと理解するが、積極的に評価されるべきで、「機械それ自体は人間の知性 (intellect) の大勝利である。」(Young 1924f, p. 2668) そして、このように特定の企業は、専門化、機械化、そして、一概には言えないが、大規模化を通じて、「経済」を実現することになるであろう。だがしかし、特定の企業の経営規模は、「いずれも、その特定の産業の特徴に、その生産物の性格に、そしてその市場のサイズによって、規定され」(Young 1929a, p. 5388) ざるをえないのである。むしろ、ヤングは、市場の大きさに規定される「分業の経済」がより重要な役割を果たすと理解していたのである。この点について、つぎのように述べる。

「ある特定の生産物のための市場が大きくなったときに、従ってその生産物はより大量に生産されうるが、獲得されるであろう経済（中略）を手に入れる歴史は、現代の産業の歴史の極めて重要な部分をかたちづくっている。これらの経済の性格と意義をよく理解するためには、特定の企業の活動ではなくて、全産業の作用 (operations) に、またはもっと適切には、ある単一の生産物の製造に貢献する関連産業の全グループの作用に注目しなければならない。これには、鉄道と他の輸送機関とともに、原料、燃料、補助物資、機械の生産者達が、すべて含まれる。」(Young 1929a, p. 5388)

現代産業の歴史的位相の把握には、市場のもつ歴史的な意義を看過すべきではないという認識が示されているようにも思われるが、この点についてはこれ以上触れない。ここでは、現代の生産物は、必ずしも特定の大規模組織の生産物ではなくて、「集計 (aggregate) としては、非常に大規模に作用している、複雑に組織された産業システムの生産物」(Young 1929a, p. 5388) であり、このような関係のなかで獲得された「経済」を内在させた生産物である、ということを確認しておきたい。

本来、個別の生産的組織の規模や専門化は、原料の性格やその地理的配置、生産物の性格、市場との距離に関する輸送およびコミュニケーションのあり

方などによって、制約をうけるというのであるが、しかしながら逆に、市場の拡大、輸送方法の改善などは、個々の組織や産業の構造を変化させ、発展させる、と理解するのである。

「産業間の分業の拡大によって、この代表企業は、それがその一部分を構成する産業と同様に、そのアイデンティティを失う。その内部経済は、その後継者である、もっと高度に専門化した事業 (undertakings) の内部経済と外部経済に分離され、そして新たな経済によって補完される。それが産業の最終生産物のための市場の成長によって生み出された新たな状況への適応 (adjustment) であるかぎり、産業間の分業は収穫逓増の媒体 (vehicle) である。」 (Young 1928b, p. 538)

ここには、市場の拡大に誘引されての個別企業および産業組織の変化が、すなわち産業間の分業が経済を実現するプロセスが極めて躍動的に描かれている。しかしながら、ここで指摘されているプロセスとは、「産業の最終生産物のための市場の成長によって生み出された新たな状況への適応」であって、その限りでは、強調されていることの内容は、積極的であれ消極的であれ、あくまでも市場の拡大という外的環境の変化への適応、ないしはそれとの調整であるようにもおもわれる。

同時にこの適応という言葉には、様々な生産活動における「ある種のバランス」、すなわち「お互いの釣り合い」 (Young 1928b, p. 533) という意味が込められていたように思われる。しかしながら、ヤングは、この適応ないしは調整のプロセスが、摩擦のない、一方的に均衡または調和に向けてのそれであるとは決して理解していなかった。なぜならば、「経済的均衡を生み出すような諸力を絶えずうち消しつつある拮抗 (counter) 力が、われわれの認識以上に、広くそして深く現代経済システムの構造 (constitution) のなかに根付いている」 (Ibid.) からである。たとえ、新たな「発明 (invention)」や科学進歩の成果の新規採用がなくとも、「生産組織の重要な前進はどれもが、産業活動の条件を改め、そして産業構造のどこかほかのところで反応を引き起こしはじめ、次には

さらに攪乱的（unsettling）な影響を及ぼすことになる。従って、変化は漸進的となり、そして累積的に伝播する」（*Ibid.*）ことになるかと理解するのである。もちろん、新たな技術革新はさらに大きな影響力を持つ攪乱要因となりうると容易に推測できるであろう。このように理解できるとするならば、市場規模の拡大は、様々な生産活動における「ある種のバランス」の下では、経済を実現する傾向があるとはいえ、バランスが実現されるプロセス自体が攪乱的影響を孕むそれでもある、と理解できるのである。

これまでは、様々な生産活動の間の「ある種のバランス」を、さしあたり、「市場の成長によって生み出された新たな状況への適応」と同じ内容を意味するものとして、解釈してきたが、厳格に述べるならば、必ずしもそうとはいえない。ヤングが「ある種のバランス」と述べる場合、市場の規模それ自体が変わりうるものとして想定されていたからである。一方的に分業または供給は市場の規模に制約されるとは理解せず、逆に前者が後者を規定すると、すなわち、「市場のサイズは生産の量によって決定され、そして限定される」（Young 1928b, p. 533）、と理解していたのである。言い換えれば、「交換される商品が収益逓増の条件下で競争的に生産される場合、そして供給の僅かな増加がそれと交換に保有されうる他の商品の量の増加を伴うという特別の意味で、個々の商品に対する需要が弾力的である場合」（*Ibid.*）、かれは、供給が需要を生み出すという「相互需要（reciprocal demand）の作用」（*Ibid.*）が働くかと理解していたのである。この点については、つぎのように述べている。

「そのような条件下でのある商品の供給の増加は他の商品に対する需要の増加である。そして、需要の増加はいずれも供給の増加を呼び起こすと考えるべきである。産業の成長率も他の産業の成長率によって条件付けられる。しかし需要と供給の弾力性は、生産物が異なれば、異なることになるので、産業によっては他の産業よりも急速に成長する。人口が定常であり、そして純粋科学と応用科学において新たな発見がみられないにしても、需要の弾力性と収穫逓増には超えられない限界が存在するが、この限界を別にすれば、拡張のプロセスには限界は存在しない。

このような仮定に基づく条件下で、もし進歩が妨げられず、また摩擦がないならば、もしある程度は試行錯誤のプロセスに頼るといようなことがなければ、もし産業組織が、当面の状況との関係で、つねに最も経済的であるようなものであるならば、収穫逓増の実現は、技術的理由からつねに同率で前進するということはあるにないが、進歩的であり継続的である。しかしこれは時間を要するプロセスであり続けるであろう。」(Young 1928b, p. 534. イタリックー原文)

これまでのヤングの議論は、いわゆる内生的成長という資本主義の経済的進歩の一般的な傾向を、または「移動均衡」を取り扱ったものであって、決して短期的な景気循環を扱ったそれではない。確かにそうではあるが、引用文を翻して解釈するならば、短期的には、進歩は妨げられ、摩擦を生み、企業家達の試行錯誤のプロセスに頼らざるをえないし、また必ずしも産業組織は最も経済的ではありえないということを示唆している、と理解してよかろう。景気循環過程において、まさにそのような状況が惹き起こされる、と。そこで、これまでの議論を踏まえて、恐慌の原因にかんする問題に立ち返ろう。

繁栄期に顕在化する市場規模の変化または有効需要の変化が供給と需要の間に摩擦を引き起こすであろうと指摘したところで、われわれの話はひとまず中断していた。従って、その続きから議論を進めたいとおもうが、その場合に、次のような論説がこれまでの議論の流れに沿うものであろう。

「共同体の異なる階層の間で所得分配がこのように変化することは不公平 (unjust) である。さらに、それらは不可避免的に財に対する需要の変化を伴うことになる。例えば、贅沢品への需要は必需品に対する需要よりもより急速に増加する。このような需要の変化は累積的圧力を加え、そしてそれが既存の産業構造に緊張を課すことになる。財需要の変化に即応して即座にかれらのプランを適応し直しそして本国の生産設備を改めることは、企業家にとっては、困難であり、おそらくは不可能である。最終財の市場だけでなく、また生産財の投資においても、所得分配の変化は重大な影響

を及ぼす。物価が上昇したことで、投資家によっては、それまでのようには貯蓄できないとわかる。しかし投資資金の新たな源泉として、事業（business undertakings）によって増加する利潤が利用できる。これらの余剰利潤—配当などとして所有者に支払われた額の残余—の大きな部分は、一般的な投資市場を探し求めない。もっと一般的には、そのような余剰利潤は『そのビジネスに再び投入される』。その結果は、過剰拡張および過剰生産—いずれにせよ、工場、設備、そして他の生産諸手段の過剰生産—という形で自らを表すことになるが、繁栄状態にある企業での過剰投資の傾向である。」（Ely 1923, p. 332）

上の引用文は、「緊張」の諸形態に言及していた【Kaldor 1990】の引用文の(3)に照らしてみた場合、それらの内容がほぼ重なっていることに気付くであろう。明らかに、より具体的に「緊張」が累積されるプロセスを描き出しているとは解釈できようが、それにしても、まだ相変わらず抽象的な説明にとどまっているという印象は否めない。したがって、以下ではその内容を追ひ、そして若干肉付けするというかたちをとりながら、「緊張」の内容に接近したい。

市場規模の変化は、贅沢品に対する急速な需要の増加として現れ、そしてこれが「既存の産業構造」に「緊張」をもたらすと述べているが、その理由は市場の拡大への適応が即応的ではありえないからであるという。では、何故に即応できないのか、まずこの点からみておこう。

先の「経済的進歩」にかんする引用文では、「競争が自由であり、摩擦のない」という仮定をおく説明をおこなっていたが、労働および資本の部門内および部門間移動が速やかに実現されうるということを与件にして、議論を展開することにその意図があった、と推測できよう。だが、これまでも指摘してきたことであるが、ヤングの理解からすれば、かかる前提をおく立場は、「全く知的方法によって構築されてきている」「現代の経済理論」のそれであって、決して「経済生活の複雑な事実の忍耐強いそしてねばり強い探求」（Young 1928d, p. 931）を行う立場ではないようにおもわれる。ヤングは明らかに後者に属するであろう。実際、先の引用文に続けて、かれは、急激な経済的進歩を制約する要因が

存在すると述べ、「第一に、使用される人間が変化に抵抗する」し、「第二に、必要な資本の蓄積は時間を要する」(Young 1928b, p. 534)、と指摘していたのである。経済生活には様々な「摩擦」が存在し、労働および資本の速やかな部門内および部門間移動は実現されえないというのが、ヤングが目の当たりにした「事実」である、と解釈すべきである。実際、かれは、たとえば、次のような項目を「忘れてはならない」と指摘しているのである。

「訓練と機会の差はいまだに人間の生産的能力に影響すること；財産相続のような制度は資本および土地に帰属する生産物がどのように配分されるべきかを決定する手助けになること；産業的変化の急速なプロセスは修得技術の強みを人間からしばしば奪うこと；何らかの種類の障害によっては、自分の生産物がより高い価値を持つ雇用へと、人間が自分の労働を移すのを妨げること；永続的形態でひとたび投資または固定された資本は特定のタイプの企業の運命 (fortunes) に、それが如何なる運命であろうと、一般には取り返しの付かないかたちで、従わざるをえないこと。」(Young 1928d, p. 931)

これらの摩擦要因は、生産と分配に絡めて指摘されたものであって、具体的な景気循環の過程を念頭においてのものではない。したがってまた、これらの要因が景気循環過程においてどの様に作用するのか、あたりまえのことであるが、触れられていない。だがわれわれは、循環過程においても、これらの要因によって労働の移動はある程度は制約されざるをえない、と理解してもよいのではなかろうか。とりわけ、資本の移動にかんしては、ヤング自身そのように理解していたと推測される。例えば、ヤングは、資本概念の区別として、原料等と機械、工場等の中の資本の区別をまずは挙げるが、「特殊的 (specialized) 資本と非特殊的 (unspecialized) 資本の間の区分」もまた重要であると述べている。これは明らかに資本の移動性を念頭においての概念区分であるといえよう。すなわち、「非特殊的資本」である原料や標準的タイプの道具や機械は、様々な最終生産物に入っていくことができるであろうが、「特殊的資本」である特殊な

機能を備えた道具や機械などはそうではないというのである。もっとも、「その差は程度の問題」であって、「大部分の資本は、資本が用いられるのは一定の領域でのみである、そして資本は他の使用よりある種の使用により良く順応しているという意味で、部分的に特殊化されている」（Young 1928c, p. 795）、と述べるのである。したがって、「財需要の変化に即応して即座にかれらのプランを適応し直しそして本国の生産設備を改めることは、企業家にとっては、困難であり、おそらくは不可能である」という文章の含意を読みとるならば、おそらくは労働および資本の移動は制約されざるをえず、そして時として「特定のタイプの企業」と「運命」をともにせざるをえないということであろう。

次に、「試行錯誤のプロセス」を企業家達の「潜在的市場」にかんする判断に係わるプロセスであると理解するならば、この点についてはどうであろうか。

まさにこの繁栄期は、「相対価格の構造のねじれ」が顕在化した段階であると理解して良からう。必需品への需要の相対的減少、また賃金等の上昇の遅れの一方では、「贅沢品」、そしてまた「工場、設備、そして他の生産諸手段」に対する需要の増加がみられるからである。ならば、「相対価格の構造のねじれ」の状況下で、企業家達の「潜在的市場」にかんする判断はどの様に遂行されるのであろうか。

本稿の冒頭で言及しておいた「投機」に関する内容を思い起こしてもらえらるならば、繁栄状態の産業に属する企業家達は、「楽観的期待」に包まれた状況にあるであろう。この「期待」にも後押しされて、実際「事業家達の活動は上昇する市場で投機的操作の性格を、傾向として、より強く帯びる」（Ely 1923, p. 331）ことになる。「投機のために、通常の需要曲線は逆さまにされなければならない」のであって、「価格が高ければそれだけ、需要はより大きい」という転倒した状況が生み出されることになる。結局のところ、「富の急激な分配の変化が産業の生産物に対する需要の予想しがたい変化を引き起こす」（Young 1924d, p. 5134）ことになるであろう。これには「資本主義的生産様式の経済」が複雑に絡み合うことにもなる。ヤングは具体的には景気循環との関連で直接触れてはいないが、既存の技術の導入だけでなく、さらには新たな技術の導入（イノベーション）が恐らくは循環過程で考えられうるであろうし、もしそうであ

るならば、後者は前者以上に「潜在的市場」にかんする判断を困難ならしめるように作用する、と思われる。このように様々な要因の波及的そして累積的影響の下で、「需要の予想しがたい変化」が惹き起こされるならば、このことがまた踏み台となって、いっそう投機が煽られることになろう。しかも、このような投機はヤングが「富の生産者」であるとか、変動を緩和すると理解するような投機では決してなくて、むしろ破壊的な「過度の投機」である。かくして、富の分配の急激な変化は、企業家達の投機的活動を煽り、結果として「ある種のバランス」を実現するというよりは、「全産業構造の健全性 (solidity) をくりぬく傾向がある」(Young 1924d, p. 5134) と、ヤングは理解するのである。

しかしながら、また何故に「健全性をくりぬく」までに、「緊張」が産業構造の内部に急速に蓄積されうるのであろうか。このことは単に投機的な活動を担う企業家達の意志のみでは説明できないように思われる。なぜならば、そのための物質的条件が整う必要がある、と考えられるからである。実際、ヤングも、急速な経済的進歩の制約要因として、「必要な資本の蓄積は時間を要する」という指摘を行っていたのである。この文章の含意から推測すれば、景気循環過程においても、何らかの意味で資本の蓄積が「緊張」の急速な累積に対する抑制要因として作用する、と解釈できるのではなからうか。もしそうであるとするならば、景気循環の過程では、何故に「緊張」が急速に累積しうるのであろうか。

ヤングの理解に立てば、経済的進歩を制約する資本の蓄積は、長期的には自発的貯蓄に基づく投資によって実現され、また自発的貯蓄はそれ自体本来は人間の習慣などの制度によって規定される、ということであろう。しかしながら、既にわれわれは、この制度的制約が、景気循環過程においては、一定程度弛緩または打破されうるメカニズムについて、理解しているのである。すなわち、確かに一面では物価上昇は貯蓄を抑制する傾向があるが、他方では、高い利子率が、自発的貯蓄を促すだけでなく、銀行信用の膨張を介在させての「非自発的貯蓄」をも強制させる。これらの要因と複雑に絡み合うことで、また「資本主義的生産様式の経済」による生産コストの削減も考慮すべきであろうが、企業は巨額の「余剰利潤」を実現しうることになる。この利潤が、「一般的な投

資市場を探し求め」ることなく、すなわち、市場を通じた客観的評価を受けることなく、再び個々の企業家達の判断と裁量の下に、「そのビジネスに再び投入される」ことになるのである。そして、「その結果は、過剰拡張および過剰生産—いずれにせよ、工場、設備、そして他の生産諸手段の過剰生産—という形で自らを表すことになるが、繁栄状態にある企業での過剰投資の傾向である」というのである。

それでは、「その場合、たとえ信用の供給が尽きないとしても、何故に拡張は止まなければならないのであろうか。」(Young 1927, p. 72) このように自問した後、ヤングは、つぎのように続ける。

「その説明は、総需要と総供給の間の差の中ではなくて、需要と供給の調整の過ち (maladjustment) に見出されなければならない。(中略) 過剰生産論および過少消費論はポイントをみすごしている。物価上昇期には、過少消費と過剰消費を伴いつつ、過剰生産と過少生産が生じる。生産の拡張は、変化する需要分布と十分にペースを保つぐらい早くその方向を変化させないし、変化させることもできない。事実、生産の拡張は、自らの勢いで、買い手の需要のシフトに対応するにはますます不適切になるような方向へと突き進む。この様にして、緊張が産業システムの中に累積し、通常の景気循環のコースであれ、紙幣インフレの時期にあつてであれ、それ自体崩壊に至る。」(Young 1927, pp. 72-73)

まずはじめに、これは【Kaldor 1990】から引用した「緊張」に関する記述のひとつ、すなわち(1)を意味するということを確認しておこう。

ここでは、「需要と供給の調整の過ち」または失敗が景気循環、そしてその一部を構成する恐慌を引き起こすと指摘されている。だからといって、社会主義者が主張するように、「過剰生産に向けての継続的なそして抵抗し難い傾向が存在」(Ely 1923, p. 326) するということではないし、また企業家達は「機械様式の最大能力」(Ibid.) によって自らの生産活動を判断するというのでもない。あくまでも、かれらは「商品の市場にかんする自らの判断に従って、かれらの

生産活動を判断する」(Ibid.) のであって、「もし彼らが過剰生産した場合には、またはかれらの設備の生産能力があまりにも大きくなった場合には、かれらの判断が間違っていたから」(ibid.) である。まさにヤングにとっての問題はこの点に、すなわち「ビジネスマン全体がしばしば過ちをおかす」(ibid.) という事実にあったのである。

最後に、恐慌の契機に触れておこなうならば、われわれは、銀行準備の枯渇をきっかけにして繁栄は突如として阻止される、ということについて理解している。だが、契機はそれだけではない。「一層の価格上昇を阻止するものは何であれ、それが崩壊を早めるのは確かである」(ibid. p. 331) からである。「他の要因、すなわち、穀物収穫の減少、または他の国での恐慌も重大な影響を及ぼすであろう。」(ibid. p. 335) そして、「事業の拡大、そして特に事業債務の拡大は、恐慌前の繁栄期を特徴づけ」ていたが、複雑に入り組んだ産業システムにあつて、契約および信用関係は「あるひとが債権者に支払うことができる」のは「明らかにかれの債務者がかれに支払うことができる」という関係のうえに成り立っていた。しかし、価格上昇の突然の崩壊は、この「信用ネットワークの崩壊」をもたらすことになるであろう。そのために恐慌のきっかけが何であれ、「恐慌は契約と信用の崩壊として特徴づけられる」(Young 1924d, p. 5132) ことになるのである。

おわりに

以上、ヤングの景気循環論に傾聴してきた。それにしても、本稿は、時として極めて抽象的で、また時として具体的すぎるという意味では、論理的展開に一貫性を欠くという嫌いがあるかもしれない。だがこれは、ある面では、意図したことでもあった。それは、ヤングが体系的かつより具体的な文献を残していないことから、それに代わる素材を提供したい、と考えたからでもある。いずれにせよ、問題はあろうが、ヤングの繁栄期および恐慌時の銀行信用の役割にかんする理解にある程度は接近することができたのではなかろうか。

さて、ヤングは、これまで述べてきたことから明らかなように、経済学の

重要な課題のひとつが景気循環の「メカニズム」の解明にある、と認識していた。そもそも、かれにとっての経済学は、「富の科学」という定義で満足できるものではなくて、「経済生活の社会的諸問題（communal problems）」を取り扱う科学であり、政策への関心から生まれるものであった。従って、「ポリティカルエコノミー」が「適切な印象」を与える概念であり（Young 1928b, p. 925）、伝統的な経済学がそうであったように、「特定の志向（orientation）」（Young 1929c, p. 55）を意味するものであった。

ここで改めて、ヤングの接近視角について、極めて概略的ではあるが、当時の経済学の立場と絡めて述べておくならば、「人間の心理及び人間の諸制度は、繁栄と不況という規則正しい繰り返しを説明できないように思われる」と述べていることから窺えるように、いわゆる「制度経済学」に属する立場ではなかった。科学としての経済学の説明にあたって、かれ自身「力学」のアナロジーを援用するところを考慮すると、むしろ「新古典派」の立場に近い、といえるであろう。だがこのことを拠り所にして、かれを全く後者の立場に与していたと理解するならば、この解釈もまた矮小化を免れえないであろう。本稿のなかでもおりおり指摘していたことから明らかであるとはおもうが、かれは、歴史的事実、制度的要因を重視し、対象への「一体」としての接近を、しかもプロセスを重視したことなどからも窺えるように、かれらの分析装置に対して批判的であったからである。

このような立場から、ヤングは、景気循環の、特に恐慌の直接的原因が、「銀行信用量の不安定性」も含め、「外生的」なものにあるのではなくて、あくまでも「内在的」な要因に起因する「緊張」にあるということを描き出す。それ故に、かれは、「景気循環の純粹に貨幣的現象としての解釈」には一定の距離をおかざるをえなかった。しかしながら、このことが強調されるあまり、次のことがヤングによって十分に理解されていたということが、看過されてはならないのである。すなわち、恐慌は銀行制度に組み込まれた貨幣制度や貨幣的現象を抜きにしては決して説明しえないということである。このような意味で、かれの景気循環にかんする考えは、決して R. G. ホートレーのそれと同じものではなかったが、敢えていえば、近い位置にあった。これに比べれば、ヤングと I. フ

イシャーの間にある溝は極めて深いものであった。それでは、フィシャーと厳しく対立していた連邦準備局の考えにヤングのそれは近いものであったかといえ、これもまた否定せざるをえないのである。

また、同時代の景気循環に関する議論を踏まえるならば、ヤングの場合には、景気循環も含めて、経済的進歩に関して決して悲観的ではなく、むしろ楽観的すぎるという印象すら拭いきれない。そうではあるが、かれにおいても、「志向」という観点から捉えるならば、恐慌は経済生活における重大な「経済的病弊 (economic disease)」であり、完全には治癒できないであろうが、処方箋を必要とされるべきものであった。それ故に、その「力学的」ないしは「機械的」な「メカニズム」の解明は、手段としての意味も含めて、積極的に取り組むべき重要な課題であった。なぜならば、「探究によって得られる知識は実際的で実用的知識であり、そして実用的ルールに加工されうる。これが、特定のコントロール手段の効果の一般的性格がどのようなものであるのか、もしわれわれが特定のレバーを引いたら何が起こりうるのか、われわれに教えてくれる」(Young 1929c, p. 61)、と理解していたからである。

それにしても、如何なる経済主体が「レバー」を握るべきであると理解していたのであろうか。それはなぜであろうか。また「レバー」の具体的内容とは何か。またどの様に操作されるべきであろうか。それは裁量であるべきなのか、それともルールであるべきなのか。またこれらは連邦準備制度とどの様に関係してくるのであろうか。

これらのことを明らかにすることがまた、1930年代の銀行制度改革の理解を深めることになるであろう。なぜならば、銀行制度改革に積極的に係わった人物のひとりがL. カリー (Lauchlin Currie) であったが、かれはハーバード大学時代ヤングの指導を受け、「ヤングの遺徳を偲び」、その著書【Currie 1934】をヤングに捧げたことにもその一端を窺えるように、その影響を強く受けつづけた人物であったからである。

引用および参考文献

- Blicht, Charles P. 1995. *Allyn Young: The Peripatetic Economist*. St. Martin's Press.
- Currie, Lauchlin., 1934. *The Supply and Control of Money in the United States*. Harvard University Press.
- D'arista, Jane W., 1994. *The Evolution of U. S. Finance*. M. E. Sharpe.
- Ely, Richard T., Adams, Thomas A., Lorenz, Max O. and Young, Allyn A. 1908. *Outlines of Economics*. Revised ed. The Macmillan Company.
- . 1916. *Outlines of Economics*. 3rd ed. The Macmillan Company.
- . 1923. *Outlines of Economics*. 4th ed. The Macmillan Company.
- Kaldor, Nicholas. 1990. "Nicholas Kaldor's Notes on Allyn Young's LSE Lectures, 1927-29." *Journal of Economic Studies*, Vol. 17, no. 3/4.
- Laidler, David. 1993. "Hawtrey, Harvard, and the origins of the Chicago tradition." *Journal of Political Economy*, Vol. 101, no. 6.
- . 1999. *Fabricating the Keynesian Revolution: Studies of the Inter-war Literature on Money, the Cycle, and Unemployment*. Cambridge University Press.
- Mehrling Perry G. 1996. "The Monetary thought of Allyn Abbott Young." *History of Political Economy*, Vol. 28, no. 4.
- . 1997. *The Money Interest and the Public Interest: American Monetary Thought, 1920-1970*. Harvard University Press.
- Mehrling Perry G., and Sandilands, Roger J. 1999. *Money and Growth: Selected Papers of Allyn Abbott Young*. Routledge.
- Mints, Lloyd W. 1945. *A History of Banking Theory in Great Britain and the United States*. University of Chicago Press.
- Sandilands, Roger J. 1999. "New evidence on Allyn Young's style and influence as a teacher." *Journal of Economic Studies*, Vol. 26, no. 6.
- . 2000. "Perspectives on Allyn Young in theories of endogenous growth." *Journal of the History of Economic Thought*, Vol. 22, no. 3.
- Wueschner, Silvano A. 1999. *Charting Twentieth-century Monetary Policy: Herbert Hoover and Benjamin Strong, 1917-1927*. Greenwood Press.
- Young, Allyn A. 1924a. Review of *Currency and Credit and Monetary Reconstruction*, by Ralph Hawtrey. *American Economic Review*, Vol. 14, no. 2.
- . 1924b. "Mobilizing banking credits: The drastic reform of the banking system of the United States: Possibilities of the Federal Reserve." Ch. 33 in *The Book of Popular Science*, Vol. 13. The Grolier Society.
- . 1924c. "Insurance and speculation: How economic risks are diminished by combination and organization: The good and evil speculation does." Ch. 35 in *The Book of Popular Science*, Vol. 14. The Grolier Society.
- . 1924d. "Money and prices: How unstable prices work havoc to industry and injustice to

- individuals: The business cycle an economic disease.” Ch. 36 in *The Book of Popular Science*, Vol. 15. The Grolier Society.
- . 1924e. “Dear and cheap money: The Bank of England and the mechanism of the London money market; How the foreign exchanges operate.” Ch. 34 in *The Book of Popular Science*, Vol. 14. The Grolier Society.
- . 1924f. “Wealth and well-being: The true nature of wealth, and the end and aim of human effort in trade and industry: The value of American accumulations.” Ch. 20 in *The Book of Popular Science*, Vol. 8. The Grolier Society.
- . 1924g. “The Sources of wealth: The necessary parts by land, capital, and labor in the production of wealth: The problems of our savings.” Ch. 26 in *The Book of Popular Science*, Vol. 10. The Grolier Society.
- . 1924h. “The meaning of value: The remarkable and all-important interplay of supply and demand: Paradoxes of value and price.” Ch. 30 in *The Book of Popular Science*, Vol. 12. The Grolier Society.
- . 1927. *Economic Problems, New and Old*. Houghton Mifflin.
- . 1928a. *An Analysis of Bank Statistics for the United States*. Harvard University Press.
- . 1928b. “Increasing returns and economic progress.” *Economic Journal* Vol. 38 No. 152.
- . 1928c. “Capital.” *Encyclopaedia Britannica*. The Encyclopaedia Britannica Company.
- . 1928d. “Economics.” *Encyclopaedia Britannica*. The Encyclopaedia Britannica Company.
- . 1929a. “Big business: How the economic system grows and evolves like a living organism.” Ch. 38 in *The Book of Popular Science*, Vol. 15. The Grolier Society.
- . 1929b. “Supply and demand.” *Encyclopaedia Britannica*. The Encyclopaedia Britannica Company.
- . 1929c. “Economics.” In *Research in the Social Sciences*, edited by Wilson Gee. The Macmillan Company.
- 松尾 隆. 2002. 「景気回復と銀行信用—アレン・A・ヤングの景気循環論(1)—」『アドミニストレーション』(熊本県立大学)、第8巻3・4合併号。